

修正内容一覧

物質ID	物質名	CAS番号	項目	修正前					修正後					備考		
				分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類根拠・問題点	分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報		注意書き	分類根拠・問題点
20A2008	ジチオリン酸S-(4,6-ジアミノ-1,3,5-トリアジン-2-イルメチル)O,O-ジメチル	78-57-9	呼吸器感作性または皮膚感作性	呼吸器感作性:分類できない 皮膚感作性:分類できない	—	—	—	—	(呼吸器感作性) 分類できない。 (皮膚感作性) 分類できない。	呼吸器感作性:分類できない 皮膚感作性:分類できない	—	—	—	—	(呼吸器感作性) データなし。 (皮膚感作性) データなし。	2013.10修正
20A2023	4-クロロ-オルト-トルイジン	95-69-2	自己発熱性物質および混合物	区分外	—	—	—	—	融点が140℃以下の固体に適した試験方法が確立していない。	分類できない	—	—	—	—	融点が140℃以下の固体に適した試験方法が確立していない。	2013.10修正
20A2024	3,4-ジクロロアニリン	95-76-1	可燃性固体	区分外	—	—	—	—	NFPA (13th, 2006)の分類はIであり通常の燃焼性物質に相当する。しかしERG (2008)では易燃性ではないとされており分類できない。	分類できない	—	—	—	—	NFPA (13th, 2006)の分類はIであり通常の燃焼性物質に相当する。しかしERG (2008)では易燃性ではないとされており分類できない。	2013.10修正
20A2025	2,4,5-トリクロロフェノール	95-95-4	急性毒性(経口)	区分外	—	—	—	—	ラットLD50値が820 mg/kg(EHC 93, 1979)、2460-2960mg/kg (EHC 93,1979, DFGOT 12, 1999)、>2500mg/kg (DFGOT 12, 1999)、2960 mg/kg (DFGOT 12, 1999, IARC 20,1979)であり、区分(国連分類では区分5)とした。	区分外	—	—	—	—	ラットLD50値が820 mg/kg(EHC 93, 1979)、2460-2960mg/kg (EHC 93,1979, DFGOT 12, 1999)、>2500mg/kg (DFGOT 12, 1999)、2960 mg/kg (DFGOT 12, 1999, IARC 20,1979)であり、区分外(国連分類では区分5)とした。	2013.10修正
20A2031	N-イソプロピル-N'-フェニル-パラ-フェニレンジアミン	101-72-4	水生環境有害性(長期間)	区分1	環境	警告	長期的影響により水生生物に非常に強い毒性	—	毒性区分1であり、急速分解性がない(難分解性、BODによる分解度:2.2%(既存点検, 1994))ことから、区分1とした。	区分1	環境	警告	長期的影響により水生生物に非常に強い毒性	—	急性毒性区分1であり、急速分解性がない(難分解性、BODによる分解度:2.2%(既存点検, 1994))ことから、区分1とした。	2013.10修正
20A2032	ジシクロヘキシルアミン	101-83-7	急性毒性(経口)	区分3	どくろ	危険	飲み込むと有毒	—	ラットのLD50値には、373 mg/kg(PATTY (5th, 2001)), 200 mg/kg[IUCLID (2000)], 240mg/kg (ca.) [HSDB (2003)], 500 mg/kg[IUCLID (2000)]があるが、これらのうち危険性の高い区分を採用してJIS分類基準の区分3(国連分類基準の区分3)とした。	区分3	どくろ	危険	飲み込むと有毒	—	ラットのLD50値には、373 mg/kg(PATTY (5th, 2001)), 200 mg/kg[IUCLID (2000)], 240mg/kg (ca.) [HSDB (2003)], 500 mg/kg[IUCLID (2000)]があるが、これらのうち危険性の高い区分を採用して区分3とした。	2013.10修正
20A2032	ジシクロヘキシルアミン	101-83-7	急性毒性(経皮)	区分3	どくろ	危険	皮膚に接触すると有毒	—	ウサギのLD50値には、316 mg/kg(PATTY (5th, 2001)), 200-316 mg/kg(HSDB (2003))があり、これらはJIS分類基準の区分3(国連分類基準の区分2)に該当する。	区分3	どくろ	危険	皮膚に接触すると有毒	—	ウサギのLD50値には、316 mg/kg(PATTY (5th, 2001)), 200-316 mg/kg(HSDB (2003))があり、これらにより区分3とした。	2013.10修正
20A2032	ジシクロヘキシルアミン	101-83-7	急性毒性(吸入:粉塵、ミスト)	区分4	感嘆符	警告	吸入すると有害	—	ラットのLD50値> 1.4 mg/L, 6hour(s) (4時間換算値 LC50= 2.1mg/kg) (IUCLID (2000))によりJIS分類基準の区分4(国連分類基準の区分3)とした。なお、飽和蒸気圧濃度(188.7 ppmV)の90%値(40 ppmV)より高いのでミストと判断した。	区分4	感嘆符	警告	吸入すると有害	—	ラットのLD50値> 1.4 mg/L, 6hour(s) (4時間換算値 LC50= 2.1mg/kg) (IUCLID (2000))により区分4とした。なお、飽和蒸気圧濃度(188.7 ppmV)の90%値(40 ppmV)より高いのでミストと判断した。	2013.10修正
20A2035	4-クロロフェノール	106-48-9	生殖細胞変異原性	分類できない	—	—	—	—	in vitroのデータがなく分類できない。なお、in vitro変異原性試験(Ames試験は陽性および陰性の結果がある(ATSDR(1999), NTP DB (access on June 2008))。)	分類できない	—	—	—	—	in vivoのデータがなく分類できない。なお、in vitro変異原性試験(Ames試験は陽性および陰性の結果がある(ATSDR(1999), NTP DB (access on June 2008))。)	2013.10修正
20A2038	2-ジメチルアミノエタノール	108-01-0	爆発物	区分外	—	—	—	—	爆発性に関わる原子団を含んでいない。	分類対象外	—	—	—	—	爆発性に関わる原子団を含んでいない。	2013.10修正
20A2040	プロピレングリコールモノメチルエーテルアセテート	108-65-6	皮膚感作性	区分外	—	—	—	—	モルモットを用いた複数の試験(Magnusson-Kligman maximization testまたはmethod of Maguire)において、いずれも刺激性なし(not sensitizing)の結果(SIDS(access on June 2008))、DFGOT vol. 5 (1993)に基づき区分外とした。	区分外	—	—	—	—	モルモットを用いた複数の試験(Magnusson-Kligman maximization testまたはmethod of Maguire)において、いずれも感作性なし(not sensitizing)の結果(SIDS(access on June 2008))、DFGOT vol. 5 (1993)に基づき区分外とした。	2018.7修正
20A2043	チオジエチレングリコール	111-48-8	急性毒性(経口)	区分外	—	—	—	—	ラットLD50値あるいはがいずれも5000mg/kg以上(SIDS (2004))により区分外とした。	区分外	—	—	—	—	ラットLD50値がいずれも5000mg/kg以上(SIDS (2004))により区分外とした。	2013.10修正
20A2043	チオジエチレングリコール	111-48-8	急性毒性(吸入:粉塵、ミスト)	分類できない	—	—	—	—	ラットLC0> 5.4 mg/L/1h = 1.4 mg/L/4h (SIDS (2004))の記載があるがデータ不足により分類できない。	分類できない	—	—	—	—	ラットLC0> 5.4 mg/L/1h = 1.4 mg/L/4h (SIDS (2004))の記載があるがデータ不足により分類できない。	2013.10修正
20A2046	トリエチレンテトラミン	112-24-3	標的臓器/全身毒性(反復暴露)	分類できない	—	—	—	—	ラットの4ヶ月の経口投与試験で215mg/kgの用量で、中枢神経系の興奮、血清中のタンパク質、ヘモグロビン、尿酸値の減少が認められている(SIDS(1998))。またラットの10ヶ月の経口投与試験で0.8mg/kgの用量で興奮性の増加、感覚反射の促進が認められている(SIDS(1998))。ヒトはく露例でリンパ球や好中球増加、眠気、頭痛、胃の痛み、疲労感、脱力感や食欲減退が報告されている(SIDS(1998))。動物試験およびヒトのばく露において血液、中枢神経系への影響が疑われるが、データ不足により分類できないとした。	分類できない	—	—	—	—	ラットの4ヶ月の経口投与試験で215mg/kgの用量で、中枢神経系の興奮、血清中のタンパク質、ヘモグロビン、尿酸値の減少が認められている(SIDS(1998))。またラットの10ヶ月の経口投与試験で0.8mg/kgの用量で興奮性の増加、感覚反射の促進が認められている(SIDS(1998))。ヒトはく露例でリンパ球や好中球増加、眠気、頭痛、胃の痛み、疲労感、脱力感や食欲減退が報告されている(SIDS(1998))。動物試験およびヒトのばく露において血液、中枢神経系への影響が疑われるが、データ不足により分類できないとした。	2013.10修正

物質ID	物質名	CAS番号	項目	修正前					修正後					備考		
				分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き			
20A2047	ジエチレングリコールモノブチルエーテル	112-34-5	皮膚腐食性/刺激性	区分外	—	—	—	—	ウサギを用いた試験で「刺激性なし」あるいは「軽度の刺激性」の結果 (IUCLID(2000)、BUA(1997)、HSDB(2997)) が得られ、ヒトで行ったパッチテストでは一部の被験者に紅斑を認めたのみであった (DFGOT VII(1992)、ECETOC TR.64(1995)、HSDB(2007)) ことからJIS分類基準の区分外(関連分類基準の区分3)とした。	区分外	—	—	—	—	ウサギを用いた試験で「刺激性なし」あるいは「軽度の刺激性」の結果 (IUCLID(2000)、BUA(1997)、HSDB(2007)) が得られ、ヒトで行ったパッチテストでは一部の被験者に紅斑を認めたのみであった (DFGOT VII(1992)、ECETOC TR.64(1995)、HSDB(2007)) ことからJIS分類基準の区分外(関連分類基準の区分3)とした。	2013.10修正
20A2048	テトラエチレンペンタミン	112-57-2	呼吸器感作性または皮膚感作性	呼吸器感作性: 分類できない 皮膚感作性: 区分1	感嘆符	呼吸器感作性 — (皮膚感作性) 警告	(呼吸器感作性) — (皮膚感作性) アレルギー性皮膚反応を引き起こすおそれ	—	(呼吸器感作性) データなし。 (皮膚感作性) モルモットを用いた皮膚感作性試験 (Maximization Test) において「陽性率14/18(0.56%)」を「陽性率14/18(78%)」感作性あり (sensitizing) の結果 (SIDS(access on 6 2008)) に基づき区分1とした。	呼吸器感作性: 分類できない 皮膚感作性: 区分1	感嘆符	呼吸器感作性 — (皮膚感作性) 警告	(呼吸器感作性) — (皮膚感作性) アレルギー性皮膚反応を引き起こすおそれ	—	(呼吸器感作性) データなし。 (皮膚感作性) モルモットを用いた皮膚感作性試験 (Maximization Test) において「陽性率78%(14/18)」で感作性あり (sensitizing) の結果 (SIDS(access on 6 2008)) に基づき区分1とした。	2013.10修正
20A2050	アセチルアセトン	123-54-6	標的臓器/全身毒性 (反復暴露)	区分2(神経系、胸腺)	健康有害性	警告	長期又は反復暴露による臓器(神経系、胸腺)の障害のおそれ	—	ラットを用いた2週間(10~11回)反復経口ばく露試験において、500 mg/kg/dayまたはそれ以上の用量で死亡、呼吸困難、振戦、運動失調などの症状発現と共に加え、胸腺の壊死、腸間膜リンパ節のリンパ節炎が観察された。ラットに吸入あるいは経皮ばく露した試験でも高用量で同様な所見が報告され、さらに病理組織学的変化として脳の神経変性と胸腺のリンパ性変性が記述されていることから、2週間経口ばく露による一般症状の発現は中枢神経系への影響と考えられる。経口ばく露の500 mg/kg/day(90日補正76.9 mg/kg/day)はガイダンス値区分2の範囲に相当しており、胸腺のリンパ性変性の所見と合わせ「区分2(中枢神経系、胸腺)」とした。	区分2(中枢神経系、胸腺)	健康有害性	警告	長期又は反復暴露による臓器(中枢神経系、胸腺)の障害のおそれ	—	ラットを用いた2週間(10~11回)反復経口ばく露試験において、500 mg/kg/dayまたはそれ以上の用量で死亡、呼吸困難、振戦、運動失調などの症状発現と共に加え、胸腺の壊死、腸間膜リンパ節のリンパ節炎が観察された。ラットに吸入あるいは経皮ばく露した試験でも高用量で同様な所見が報告され、さらに病理組織学的変化として脳の神経変性と胸腺のリンパ性変性が記述されていることから、2週間経口ばく露による一般症状の発現は中枢神経系への影響と考えられる。経口ばく露の500 mg/kg/day(90日補正76.9 mg/kg/day)はガイダンス値区分2の範囲に相当しており、胸腺のリンパ性変性の所見と合わせ「区分2(中枢神経系、胸腺)」とした。	2013.10修正
20A2051	ジアリルフタレート	131-17-9	急性毒性(吸入: 粉塵、ミスト)	区分3	どくろ	危険	吸入すると有毒	—	飽和蒸気圧濃度は0.002mg/L(ICSC(2006))である。ラットを用いたLC50値8.3mg/L(1h)(SIDS, access on 7, 2008)は、飽和蒸気圧濃度より高い濃度であるため、「粉塵・ミスト」としてmg/L濃度基準値で分類を行い、8.3mg/L(1h)(換算値:2.1mg/L/4h)に基づき、区分4とした。	区分4	感嘆符	警告	吸入すると有害	—	飽和蒸気圧濃度は0.002mg/L(ICSC(2006))である。ラットを用いたLC50値8.3mg/L(1h)(SIDS, access on 7, 2008)は、飽和蒸気圧濃度より高い濃度であるため、「粉塵・ミスト」としてmg/L濃度基準値で分類を行い、8.3mg/L(1h)(換算値:2.1mg/L/4h)に基づき、区分4とした。	2013.10修正
20A2054	2-メルカプトベンゾチアゾール	149-30-4	呼吸器感作性または皮膚感作性	呼吸器感作性: 分類できない 皮膚感作性: 区分1	感嘆符	呼吸器感作性 — (皮膚感作性) 警告	(呼吸器感作性) — (皮膚感作性) アレルギー性皮膚反応を引き起こすおそれ	—	(呼吸器感作性) データなし。 (皮膚感作性) モルモットを用いたmodified Buehler法 ((PATY (5th 2001)), maximization法で感作性あり (IUCLID(2001)、BUA Report TR74(1991)) に基づき区分1とした。なお、ヒトにおいて2-メルカプリアリトベンゾチアゾールが履物による接触性皮膚炎の原因であるとの報告(EU-RAR, 1999)がある。また、EU分類ではR43(区分1相当)に分類されている(EU-Annex I, access on 7 2008)。	呼吸器感作性: 分類できない 皮膚感作性: 区分1	感嘆符	呼吸器感作性 — (皮膚感作性) 警告	(呼吸器感作性) — (皮膚感作性) アレルギー性皮膚反応を引き起こすおそれ	—	(呼吸器感作性) データなし。 (皮膚感作性) モルモットを用いたmodified Buehler法 ((PATY (5th 2001)) およびmaximization法 (ECETOC 77 (1999)) でいずれも感作性ありの結果に基づき区分1とした。なお、加硫促進剤として使用される本物質が、ヒトで履物による接触性皮膚炎の重大な原因であることが示されている (ECETOC 77 (1999))。また、EU分類ではR43(区分1相当)に分類されている(EU-Annex I, access on 7 2008)。	2013.10修正
20A2054	2-メルカプトベンゾチアゾール	149-30-4	生殖毒性	区分2	健康有害性	警告	生殖能又は胎児への悪影響のおそれの疑い	—	ラットの器官形成期に経口投与した発生毒性試験で、母体への毒性がみられた濃度で、着床後胎児死亡が低下傾向を示した(PATY 5th, (2001))との記載より区分2とした。	区分外	—	—	—	—	ラットを用い、交配前から妊娠、授乳期間を通して二世代にわたり混種投与した生殖試験(2500、8750、15000 ppm)において、8750 ppm以上でF1仔の体重が低下したが、各用量とも生殖の指標に投与の影響は認められなかった。一方、妊娠ラットの器官形成期に経口投与した催奇形性試験(300、1200、1800 mg/kg)において、1200 mg/kg以上の用量で母体に毒性症状が見られたが、催奇形性を含め仔の発生に対する悪影響の報告はなく、また、妊娠ウサギの器官形成期に経口投与した催奇形性試験(50、150、300 mg/kg)でも、各用量とも胎仔または発生毒性の徴候は認められなかった(PATY (5th, 2001))。以上より、ラットを用いた二世代生殖試験において性機能および生殖能に対する悪影響はなく、かつラットおよびウサギを用いた発生毒性試験で両動物種とも仔の発生に対する悪影響がなかったことから区分外とした。	2013.10修正
20A2059	N-メチル-2-ピロリドン	872-50-4	生殖細胞変異原性	分類できない	—	—	—	—	マウスの小核試験、チャイニーズハムスターの染色体異常試験で陰性(いずれもCICADs(J) No.35.2001)であることから区分外とした。Ames試験においても陰性(CICADs(J) No.35.2001; NTP DB, 2008)である。なお、マウスの慢性致死試験で毒性徴候が報告されている濃度において「着床後胚損失が対照群に比べ有意に増加した」(CICADs(J)No.35.2001)とあるが、「十分な検証はできなかった」ことから考慮しなかった。	区分外	—	—	—	—	マウスの小核試験、チャイニーズハムスターの染色体異常試験で陰性(いずれもCICADs(J) No.35.2001)であることから区分外とした。Ames試験においても陰性(CICADs(J) No.35.2001; NTP DB, 2008)である。なお、マウスの慢性致死試験で毒性徴候が報告されている濃度において「着床後胚損失が対照群に比べ有意に増加した」(CICADs(J)No.35.2001)とあるが、「十分な検証はできなかった」ことから考慮しなかった。	2013.10修正

物質ID	物質名	CAS番号	項目	修正前					修正後					備考		
				分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き		分類結果・問題点	
20A2067	亜鉛	7440-66-6	水生環境有害性(長期間)	区分1	環境	警告	H410:長期継続的影響によって水生生物に非常に強い毒性		金属化合物であることから、急速分解性はないと判断され、急性分類が区分1であることから、区分1とした。	区分1	環境	警告	H410:長期継続的影響によって水生生物に非常に強い毒性		金属であることから、急速分解性はないと判断され、急性分類が区分1であることから、区分1とした。	2016.10.31修正
20A2071	グアニジン・塩酸塩	50-01-1	自己反応性物質および混合物	区分外	—	—	—		爆発性、自己反応性に関する原子団を含んでいない。	分類対象外	—	—	—		爆発性、自己反応性に関する原子団を含んでいない。	2013.10修正
20A2072	アトロピン	51-55-8	標的臓器/全身毒性(単回暴露)	区分1(中枢神経系)	健康有害性	危険	臓器(中枢神経系)の障害		ヒトにおいて筋力低下、視野の変化(RTECS(2008))また、ヒト経口中毒量5~10mg(成人)において、一時的な精神錯乱、興奮、幻覚、狂燥状態、発熱、頭痛、めまい、運動失調、筋無力、筋硬直、麻痺、貧脈、血圧低下、呼吸数増加、瞳孔拡大、眼圧上昇、視力障害、頻尿、尿閉、呼吸抑制、昏睡、延髄麻痺等が知られ、作用機構として、コリン作動性節後線維の効果器管において、伝達物質であるアセチルコリンと受容体を奪い合うことによって効果を遮断する(急性中毒情報ファイル 廣川書店 第2版(1994))ことから区分1(中枢神経系)とした。	区分1(中枢神経系)	健康有害性	危険	臓器(中枢神経系)の障害		ヒトにおいて筋力低下、視野の変化(RTECS(2008))また、ヒト経口中毒量5~10mg(成人)において、一時的な精神錯乱、興奮、幻覚、狂燥状態、発熱、頭痛、めまい、運動失調、筋無力、筋硬直、麻痺、頻脈、血圧低下、呼吸数増加、瞳孔拡大、眼圧上昇、視力障害、頻尿、尿閉、呼吸抑制、昏睡、延髄麻痺等が知られ、作用機構として、コリン作動性節後線維の効果器管において、伝達物質であるアセチルコリンと受容体を奪い合うことによって効果を遮断する(急性中毒情報ファイル 廣川書店 第2版(1994))ことから区分1(中枢神経系)とした。	2013.10修正
20A2083	4-(2-メチル-4-クロロフェノキシ)酪酸(別名MCPB)	94-81-5	水反応可燃性化学品	分類できない	—	—	—		金属または半金属(B, Si, P, Ge, As, Se, Sn, Sb, Te, Bi, Po, At)を含んでいない。	分類対象外	—	—	—		金属または半金属(B, Si, P, Ge, As, Se, Sn, Sb, Te, Bi, Po, At)を含んでいない。	2013.10修正
20A2086	メタクリル酸イソブチル	97-86-9	自己反応性物質および混合物	タイプG	—	—	—		不飽和結合であるアクリル基を含み、自己重合防止剤(ハイドロキノンモノメチルエーテル)を加えた輸送物(UN2283)はクラス3で危険物に当たらず、タイプGである。	タイプG	—	—	—		自己反応性に関する原子団(不飽和結合であるアクリル基)を含み、一般流通品は自己重合防止剤(ハイドロキノンモノメチルエーテル)を加えた国連危険物輸送動ではUN2283(クラス3)であり、自己反応性化学品には該当しないので、タイプGに分類される。	2013.10修正
20A2090	ブロピルベンゼン	103-65-1	引火性液体	区分3	炎	警告	引火性液体及び蒸気		引火点は30°C(Chapman Ver 16:1(2008)), 39°C(ホンメル(1996)), 30°C(NEPA(13th, 2006))である。いずれも、引火点が23°C以上および60°C以下であり、UNTRG分類はClass 3(引火性液体)、国連容器等級IIIであることから区分3とした。	区分3	炎	警告	引火性液体及び蒸気		引火点は30°C(Chapman Ver 16:1(2008)), 39°C(ホンメル(1996)), 30°C(NEPA(13th, 2006))である。いずれも、引火点が23°C以上および60°C以下であり、UNRTDG分類はClass 3(引火性液体)、国連容器等級IIIであることから区分3とした。	2013.10修正
20A2092	2,2'-メチルイミノジエタノール	105-59-9	水生環境有害性(長期間)	区分3	—	—	長期的影響により水生生物に有害		藻類(セネデムス)の96時間EC50 = 20 mg/L (IUCLID, 2000)から、区分3とした。	区分3	—	—	長期的影響により水生生物に有害		急性毒性区分3であり、急速分解性がない(難分解性、BODIによる分解度:22.0、0%(既存点検 2005))ことから、区分3とした。	2013.10修正
20A2101	2-ヘキシルオキシエタノール	112-25-4	急性毒性(吸入:蒸気)	分類できない	—	—	—		ラットを用いた吸入暴露試験(IUCLID, 2000)のLC50(4h) > 0.5 g/L(換算値:84ppm)は、飽和蒸気圧濃度(129ppm)の90%(116ppm)より低い濃度であるため、「ミストがほとんど混在しない蒸気」となるが、このデータだけでは区分2から区分外のいずれか特定できないことから、分類できないとした。	分類できない	—	—	—		ラットを用いた吸入暴露試験(IUCLID, 2000)のLC50(4h) > 0.5 g/L(換算値:84ppm)は、飽和蒸気圧濃度(129ppm)の90%(116ppm)より低い濃度であるため、「ミストがほとんど混在しない蒸気」となるが、このデータだけでは区分2から区分外のいずれか特定できないことから、分類できないとした。	2013.10修正
20A2102	ジメチルエーテル	115-10-6	標的臓器/全身毒性(単回暴露)	区分3(麻酔作用)	感嘆符	警告	眠気又はめまいのおそれ		ガイダンス値を超える用量で実施されたウサギの吸入試験(45分)およびイスの吸入試験(5分)において麻酔作用、血圧、心拍数の低下の記載(DFGOT (vol.1, 1991))、また、ヒトにおいて意識喪失、視野喪失、痛覚喪失などの神経系の影響記載(DFGOT (vol.1, 1991))があることから区分3(麻酔作用)とした。	区分3(麻酔作用)	感嘆符	警告	眠気又はめまいのおそれ		ガイダンス値を超える用量で実施されたウサギの吸入試験(45分)およびイスの吸入試験(5分)において麻酔作用、血圧の低下、心拍数の増加の記載(DFGOT (vol.1, 1991))、また、ヒトにおいて意識喪失、視野喪失、痛覚喪失などの神経系の影響記載(DFGOT (vol.1, 1991))があることから区分3(麻酔作用)とした。	2013.10修正
20A2107	1,2,3,4-テトラヒドロナフタレン	119-64-2	呼吸器感作性または皮膚感作性	区分外	—	—	—		モルモットを用いたmaximization test (OECD TG406)において感作性なしの記載SIDS (access on 8. 2008)より区分外と判断した。	呼吸器感作性:分類できない 皮膚感作性:区分外	—	—	—		(呼吸器感作性) データなし。 (皮膚感作性)モルモットを用いたmaximization test (OECD TG406)において感作性なしの記載SIDS (access on 8. 2008)より区分外と判断した。	2013.10修正
20A2111	ナトリウムメタノレート	124-41-4	自己発熱性物質および混合物	区分1	炎	危険	自己発熱、火災のおそれ		UNTRG 4.2 IIIに分類されている。	区分1	炎	危険	自己発熱、火災のおそれ		UNRTDG 4.2 IIIに分類されている。	2013.10修正

物質ID	物質名	CAS番号	項目	修正前						修正後						備考
				分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類根拠・問題点	分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類根拠・問題点	
20A2111	ナトリウムメタノレート	124-41-4	急性毒性（経口）	区分4	感嘆符	警告	飲み込むと有害		ラットLD50の報告が4件(1500, 800, 1687, 2037)あり、3件が区分4の範囲内にある。(SIDS (access on 8, 2008))	区分4	感嘆符	警告	飲み込むと有害		ラットLD50の報告が4件(1500, 800, 1687, 2037mg/kg)あり、3件が区分4の範囲内にある。(SIDS (access on 8, 2008))	2013.10修正
20A2114	チオリン酸S-[2-(エチルスルフィニル)エチル]0,0-ジメチル(別名オキシデメトンメチル)	301-12-2	標的臓器/全身毒性(反復暴露)	区分1(神経系)	健康有害性	危険	長期又は反復暴露による臓器(神経系)の障害		ラットを用いた15日間の強制投与による神経毒性試験(用量:2.5, 10, 50 mg/kg)においてガイダンス値の区分1に相当する用量において振戦、失調性歩行、立ち上がり数の減少、縮瞳、体温低下、運動量の低下が認められ、脳コリンエステラーゼ活性の阻害が認められている(HSDB (2004))。また、ラットを用いた13週間の経口投与による神経毒性試験(用量:雄0.062, 0.62, 5.4 mg/kg、雌: 0.074, 0.75, 6.6 mg/kg)においてガイダンスの区分1に相当する用量で、振戦、攻撃的行動、後肢握力減少、体温低下、血清、赤血球、脳コリンエステラーゼ活性の阻害が認められている(HSDB (2004))。さらにマウスの21ヶ月経口投与試験(JMPR 1004 (2002))、ラットの21日間経口投与試験(JMPR 102 (1967))、6ヶ月経口投与試験(HSDB (2004))、14日間強制経口投与試験(HSDB (2004))の区分1のガイダンス範囲の用量において赤血球および脳のコリンエステラーゼ活性阻害が認められ、ヒトのボランティアにおいても血清および赤血球のコリンエステラーゼ活性阻害が認められることより(HSDB (2004))区分1(神経系)とした。	区分1(神経系)	健康有害性	危険	長期又は反復暴露による臓器(神経系)の障害		ラットを用いた15日間の強制投与による神経毒性試験(用量:2.5, 10, 50 mg/kg)においてガイダンス値の区分1に相当する用量において振戦、失調性歩行、立ち上がり数の減少、縮瞳、体温低下、運動量の低下が認められ、脳コリンエステラーゼ活性の阻害が認められている(HSDB (2004))。また、ラットを用いた13週間の経口投与による神経毒性試験(用量:雄0.062, 0.62, 5.4 mg/kg、雌: 0.074, 0.75, 6.6 mg/kg)においてガイダンスの区分1に相当する用量で、振戦、攻撃的行動、後肢握力減少、体温低下、血清、赤血球、脳コリンエステラーゼ活性の阻害が認められている(HSDB (2004))。さらにマウスの21ヶ月経口投与試験(JMPR 1004 (2002))、ラットの21日間経口投与試験(JMPR 102 (1967))、6ヶ月経口投与試験(HSDB (2004))、14日間強制経口投与試験(HSDB (2004))の区分1のガイダンス範囲の用量において赤血球および脳のコリンエステラーゼ活性阻害が認められ、ヒトのボランティアにおいても血清および赤血球のコリンエステラーゼ活性阻害が認められることより(HSDB (2004))区分1(神経系)とした。	2013.10修正
20A2118	亜硝酸ブチル	544-16-1	水反応可燃性化学品	区分外					金属又は半金属(B, Si, P, Ge, As, Se, Sn, Sb, Te, Bi, Po, At)を含まない。	分類対象外					金属又は半金属(B, Si, P, Ge, As, Se, Sn, Sb, Te, Bi, Po, At)を含まない。	2013.10修正
20A2140	カフェイン	58-08-2	酸化性固体	分類できない					データなし	分類対象外					フッ素及び塩素を含まず、酸素を含む有機化合物であるが、この酸素が炭素、水素以外の元素と化学結合していない。	2013.10修正
20A2140	カフェイン	58-08-2	有機過酸化物	分類対象外					フッ素及び塩素を含まず、酸素を含む有機化合物であるが、この酸素が炭素、水素以外の元素と化学結合していない。	分類対象外					分子内に-O-O-構造を含まない有機化合物である。	2013.10修正
20A2143	シクロヘキサン-1,2-ジカルボン酸無水物	85-42-7	急性毒性(吸入: 粉塵、ミスト)	区分外					ラットにおけるLC50値>1100 mg/m ³ /4h (ACGIH (2004))は、飽和蒸気圧濃度0.056mg/Lを超えているため、ミストに相当する。JIS分類では区分外、国連分類区分5あるいは区分外に相当する。	区分外					ラットにおけるLC50値>1100 mg/m ³ /4h (ACGIH (2004))は、飽和蒸気圧濃度0.056mg/Lを超えているため、ミストに相当する。JIS分類では区分外、国連分類区分5あるいは区分外に相当する。	2013.10修正
20A2145	1,3,5-トリクロロ-1,3,5-トリアジン2,4,6-トリオン; トリクロロイソシアヌル酸	87-90-1	爆発物	区分外					UNRTG 5.1に分類されている。	区分外					UNRTDG 5.1に分類されている。	2013.10修正
20A2145	1,3,5-トリクロロ-1,3,5-トリアジン2,4,6-トリオン; トリクロロイソシアヌル酸	87-90-1	自己反応性物質および混合物	タイプG					UNRTG 5.1に分類されている。	タイプG					UNRTDG 5.1に分類されている。	2013.10修正
20A2145	1,3,5-トリクロロ-1,3,5-トリアジン2,4,6-トリオン; トリクロロイソシアヌル酸(別名シムクロセン)	87-90-1	急性毒性(経口)	区分4	感嘆符	警告	飲み込むと有害		ラットのLD50値406 mg/kg(HSDB (2008))、490 mg/kg(IUCLID (2000))、750 mg/kg (HSDB (2008))はJIS分類基準の区分4(国連分類基準の区分3)に該当する。なお、ラットのLD50値1000 mg/kg、1060 mg/kg(male)、1010 mg/kg(female)[以上、IUCLID (2000)]のデータがあるが、元文献の記載がなかったため分類根拠には採用しなかった。	区分4	感嘆符	警告	飲み込むと有害		ラットのLD50値406 mg/kg(HSDB (2008))、490 mg/kg(IUCLID (2000))、750 mg/kg (HSDB (2008))は区分4に該当する。なお、ラットのLD50値1000 mg/kg、1060 mg/kg(male)、1010 mg/kg(female)[以上、IUCLID (2000)]のデータがあるが、元文献の記載がなかったため分類根拠には採用しなかった。	2013.10修正
20A2145	1,3,5-トリクロロ-1,3,5-トリアジン2,4,6-トリオン; トリクロロイソシアヌル酸(別名シムクロセン)	87-90-1	急性毒性(吸入: 粉塵、ミスト)	区分外					ラットのLC50は>50 mg/L/1h (> 12.5mg/L4h)(IUCLID (2000))でありJIS分類基準の区分外(国連分類基準の区分外)に該当する。なお、蒸気圧は1.25E-007mmHg(25°C, est) [換算値 0.0000166625Pa(25°C, est)](Howard (1997), SRC (Access on Sep. 2008))である。蒸気圧から飽和蒸気濃度を換算すると0.01558mg/Lとなることから粉塵と判断した。	区分外					ラットのLC50は>50 mg/L/1h (> 12.5mg/L4h)(IUCLID (2000))であり区分外に該当する。なお、蒸気圧は1.25E-007mmHg(25°C, est) [換算値 0.0000166625Pa(25°C, est)](Howard (1997), SRC (Access on Sep. 2008))である。蒸気圧から飽和蒸気濃度を換算すると0.01558mg/Lとなることから粉塵と判断した。	2013.10修正
20A2149	しゅう酸ジエチル	95-92-1	急性毒性(経皮)	区分外					モルモットの経皮試験10mL/kg(比重換算10.8g/kg)処理で経度の刺激性が認められているだけである(PATY vol.6 (5th, 2001))。また、HSDBでは、同じ試験で死亡なしと記載(HSDB (2003))しているので区分外とした。	区分外					モルモットの経皮試験10mL/kg(比重換算10.8g/kg)処理で経度の刺激性が認められているだけである(PATY vol.6 (5th, 2001))。また、HSDBでは、同じ試験で死亡なしと記載(HSDB (2003))しているので区分外とした。	2013.10修正

物質ID	物質名	CAS番号	項目	修正前					修正後					備考		
				分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き			
20A2150	アシルメタクリレート	96-05-9	眼に対する重篤な損傷性/眼刺激性	区分外	—	—	—	—	ウサギを用いたDraize試験で、結膜の充血が観察されるが、24時間で症状を示した6匹中3匹のトータルスコアはそれぞれ4、6、4で4日で0となる。4日以内に回復(ECETOC TR48(1998))することからJIS分類基準の区分外(国連分類の区分3)とした。	区分外	—	—	—	—	ウサギを用いたDraize試験で、結膜の充血が観察されるが、24時間で症状を示した6匹中3匹のトータルスコアはそれぞれ4、6、4で4日で0となる。4日以内に回復(ECETOC TR48(1998))することから区分外とした。	2013.10修正
20A2151	ブタン・2・オンオキシム	96-29-7	酸化性液体	分類対象外	—	—	—	—	フッ素及び塩素を含み、酸素を含む有機化合物であるが、この酸素が窒素、水素以外の元素と化学結合しているため分類対象外である。しかし、データがなく分類できない。	分類できない	—	—	—	—	フッ素及び塩素を含み、酸素を含む有機化合物であり、この酸素が窒素及び水素以外の元素(窒素)と化学結合しているが、データがなく分類できない。	2013.10修正
20A2153	エチレンジメタクリレート; 2-(2-メチルプロパ-2-エノイルオキシ)エチル 2-メチルプロパ-2-エノアート	97-90-5	呼吸器感受性または皮膚感受性	呼吸器感受性: 分類できない 皮膚感受性: 区分1	感嘆符	呼吸器感受性 — (皮膚感受性)警告	(呼吸器感受性) — (皮膚感受性)アレルギー性皮膚反応を引き起こすおそれ	—	(呼吸器感受性) データなし。 (皮膚感受性) エチレンジメタクリレートを含む歯科材料を扱う技師の9人中8人にエチレンジメタクリレートへのアレルギー性接触皮膚炎、感受性が報告されている(FGOT vol. 13(1999))。また、エチレンジメタクリレートを含むアクリル樹脂を扱う82人の労働者の11%に感受性が観察されたこと(FGOT vol. 13(1999))。また、複数の症例報告があり、EUはXi; R43に区分していること、ドイツDFGのMAK表にShの記載があることを考慮して区分1とした。	呼吸器感受性: 分類できない 皮膚感受性: 区分1	感嘆符	呼吸器感受性 — (皮膚感受性)警告	(呼吸器感受性) — (皮膚感受性)アレルギー性皮膚反応を引き起こすおそれ	(呼吸器感受性) データなし。 (皮膚感受性) エチレンジメタクリレートを含む歯科材料を扱う技師の9人中8人にエチレンジメタクリレートへのアレルギー性接触皮膚炎、感受性が報告されている(DFGOT vol. 13(1999))。また、エチレンジメタクリレートを含むアクリル樹脂を扱う82人の労働者の11%に感受性が観察されたこと(DFGOT vol. 13(1999))。また、複数の症例報告があり、EUはXi; R43に区分していること、ドイツDFGのMAK表にShの記載があることを考慮して区分1とした。	2013.10修正	
20A2155	メタ-ジニトロベンゼン	99-65-0	自己反応性物質および混合物	タイプG	—	—	—	—	UNRTG クラス6(UN No.3443)に分類されている。	タイプG	—	—	—	—	UNRTDG クラス6(UN No.3443)に分類されている。	2013.10修正
20A2155	メタ-ジニトロベンゼン	99-65-0	自然発火性固体	区分外	—	—	—	—	UNRTG クラス6(UN No.3443)に分類されている。	区分外	—	—	—	—	UNRTDG クラス6(UN No.3443)に分類されている。	2013.10修正
20A2156	トリフェニルホスファイト	101-02-0	自己反応性物質および混合物	タイプG	—	—	—	—	自己反応性に関わる原子団を含むため分類対象物である。危険性を示す情報は見当たらず、NFPAではInstability 1とされているので、「クラスG」とした。	タイプG	—	—	—	—	自己反応性に関わる原子団(P-O)を含むが、NFPAではInstability 1とされているので、「タイプG」とした。	2013.10修正
20A2169	ジ-ターシャリ-ブチルペルオキシド	110-05-4	自然発火性固体	分類できない	—	—	—	—	GHS定義における液体である。	分類対象外	—	—	—	—	GHS定義における液体である。	2013.10修正
20A2176	2-(2-メトキシエトキシ)エタノール	111-77-3	生殖細胞変異原性	分類できない	—	—	—	—	in vivoのデータがないので分類できない。なお、in vitroではエームズ試験およびチャイニーズハムスターのV79細胞を用いた染色体異常試験で陰性結果(EU-PAR vol.1(1999))が得られている。	分類できない	—	—	—	—	in vivoのデータがないので分類できない。なお、in vitroではエームズ試験およびチャイニーズハムスターのV79細胞を用いた染色体異常試験で陰性結果(EU-PAR vol.1(1999))が得られている。	2013.10修正
20A2176	2-(2-メトキシエトキシ)エタノール	111-77-3	生殖毒性	区分1B	健康有害性	危険	生殖能又は胎児への悪影響のおそれ	—	妊娠ラットの器官形成期に経口投与した試験の高用量(1800 mg/kg/dayまたは2165 mg/kg/day)で、母動物の体重増加抑制と併せて同胎児数の減少、吸収胚の増加、奇形発生の増加が見られた(EU-PAR vol.1(1999))。観察された奇形は全身水腫、尿閉、皮下血腫のような外表奇形に加え、重複大動脈弓、右側大動脈弓、心室中隔欠損の心血管系の内臓奇形が主であった(EU-PAR vol.1(1999))が、内臓奇形に関しては用量依存的な増加を示し、母動物の一般毒性が現れなかった用量(600 mg/kg/dayまたは700 mg/kg/day)でも明らかに増加が認められた(EU-PAR vol.1(1999)、HSDB(2007))ことから区分1Bとした。なお、仔の発生に及ぼす影響については、マウスでは大半の器官で奇形の発生(Teratogenic 12th(2007))が、またウサギでは影響が弱いものの吸収胚の増加(PATTY(5th, 2001))としてそれぞれ報告されている。EUでは生殖毒性:カテゴリー3: R63に分類されている。	区分1B	健康有害性	危険	生殖能又は胎児への悪影響のおそれ	妊娠ラットの器官形成期に経口投与した試験の高用量(1800 mg/kg/dayまたは2165 mg/kg/day)で、母動物の体重増加抑制と併せて同胎児数の減少、吸収胚の増加、奇形発生の増加が見られた(EU-PAR vol.1(1999))。観察された奇形は全身水腫、尿閉、皮下血腫のような外表奇形に加え、重複大動脈弓、右側大動脈弓、心室中隔欠損の心血管系の内臓奇形が主であった(EU-PAR vol.1(1999))が、内臓奇形に関しては用量依存的な増加を示し、母動物の一般毒性が現れなかった用量(600 mg/kg/dayまたは700 mg/kg/day)でも明らかに増加が認められた(EU-PAR vol.1(1999)、HSDB(2007))ことから区分1Bとした。なお、仔の発生に及ぼす影響については、マウスでは大半の器官で奇形の発生(Teratogenic 12th(2007))が、またウサギでは影響が弱いものの吸収胚の増加(PATTY(5th, 2001))としてそれぞれ報告されている。EUでは生殖毒性:カテゴリー3: R63に分類されている。	2013.10修正	

物質ID	物質名	CAS番号	項目	修正前					修正後					備考		
				分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き			
20A2183	ジ(ベンゾチアゾール-2-イル)ジスルフィド(別名MBTS)	120-78-5	生殖毒性	区分2	健康有害性	警告	生殖能又は胎児への悪影響のおそれの疑い		ラットの妊娠期間に経口投与した当初の試験で胎仔に水腫、血腫が見られた(BUA Report No. 126 (1993))が、その後実施された現行の要求を満たす別の試験では、出生前および後の仔の発生に有害影響を示さなかった(HSDB (2002))。この相反する結果について評価文書では、先の試験が実施上および証拠資料上の欠陥がある一方、後の試験は現行の要求を満たした試験であることから、発生に影響を示さなかった後の試験を支持している(BUA Report No. 126 (1993))。加えて、交配前からのばく露による親動物の性能および生殖能に及ぼす影響に関してもデータが不十分であることを考慮に入れ、分類できないと判断した。	分類できない					ラットの妊娠期間に経口投与した当初の試験で胎仔に水腫、血腫が見られた(BUA Report No. 126 (1993))が、その後実施された現行の要求を満たす別の試験では、出生前および後の仔の発生に有害影響を示さなかった(HSDB (2002))。この相反する結果について評価文書では、先の試験が実施上および証拠資料上の欠陥がある一方、後の試験は現行の要求を満たした試験であることから、発生に影響を示さなかった後の試験を支持している(BUA Report No. 126 (1993))。加えて、交配前からのばく露による親動物の性能および生殖能に及ぼす影響に関してもデータが不十分であることを考慮に入れ、分類できないと判断した。	2013.10修正
20A2184	4-アミノベンゼンスルホン酸	121-57-3	自然発火性固体	区分外					発火点が400°C (IUCLID (2000))を超え、70°Cを超える。	区分外					発火点が>400°C (IUCLID (2000))であり、70°Cを超える。	2013.10修正
20A2192	テトラヒドロチオフェン・1,1-0-ジオキシド(別名スルホラン)	126-33-0	水生環境有害性(急性)	区分外					魚類(メダカ)での96h-LC50>100mg/L、甲殻類(オオミジンコ)での48h-EC50=852mg/L、藻類(Pseudokirchneriella subcapitata)での72h-EbC50=500 (SIDS 2006)であることから、区分外とした。	区分外					魚類(メダカ)での96h-LC50>100mg/L、甲殻類(オオミジンコ)での48h-EC50=852mg/L、藻類(Pseudokirchneriella subcapitata)での72h-EbC50=500mg/L (SIDS 2006)であることから、区分外とした。	2013.10修正
20A2193	3-ニトロベンゼンスルホン酸ナトリウム	127-68-4	水反応可燃性化学品	区分外					化学構造に金属を含むが、水溶解度が示されているので水に対して安定である。	区分外					水溶解度: 200g/L (IUCLID (2000))であり水反応可燃性はないと考えられる。	2013.10修正
20A2204	オーラミン	492-80-8	金属腐食性物質	分類対象外					データなし。	分類できない					データなし。	2013.10修正
20A2204	オーラミン	492-80-8	眼に対する重篤な損傷性/眼刺激性	区分2A	感嘆符	警告	強い眼刺激		動物を用いた試験データがなく、分類できないとした。しかしながら、EU分類においてXi: R36Iに区分されている。なお、オーラミン塩酸塩(CAS: 2465-27-2)のデータでは、ウサギの試験において「重度の刺激性を示したが、8日以内に回復した(severe irritation which, however, healed within 8 days.）」とある(DFGOT Vol. 4, 1992)。	分類できない					動物を用いた試験データがなく、分類できないとした。しかしながら、EU分類においてXi: R36Iに区分されている。なお、オーラミン塩酸塩(CAS: 2465-27-2)のデータでは、ウサギの試験において「重度の刺激性を示したが、8日以内に回復した(severe irritation which, however, healed within 8 days.）」とある(DFGOT Vol. 4, 1992)。	2013.10修正
20A2208	プロピオン酸ノルマルブチル	590-01-2	酸化性液体	分類できない					酸素を含むが、この元素に炭素、水素以外の元素と化学結合していない。	分類対象外					酸素を含むが、この元素に炭素、水素以外の元素と化学結合していない。	2013.10修正
20A2209	ジメチル水銀	593-74-8	生殖細胞変異原性	分類できない					in vivoマウス卵母細胞を用いる異数性試験(aneuploidy test)は陰性であるが、当該試験は卵母細胞であり、染色体構造異常の評価の有無もない。また、一般的な精原細胞/精子細胞のデータはなく、in vivo体細胞変異原性試験が実施されていないため(ATSDR (1999))分類できない。なお、in vitro変異原性試験: ヒトリンパ球細胞およびチャイニーズハムスター細胞を用いる染色体異常試験の結果は陽性である(ATSDR (1999))。	分類できない					in vivoマウス卵母細胞を用いる異数性試験(aneuploidy test)は陰性であるが、当該試験は卵母細胞であり、染色体構造異常の評価の有無もない。また、一般的な精原細胞/精子細胞のデータはなく、in vivo体細胞変異原性試験が実施されていないため(ATSDR (1999))分類できない。なお、in vitro変異原性試験: ヒトリンパ球細胞およびチャイニーズハムスター細胞を用いる染色体異常試験の結果は陽性である(ATSDR (1999))。	2013.10修正

物質ID	物質名	CAS番号	項目	修正前						修正後						備考	
				分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類根拠・問題点	分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類根拠・問題点		
20A2212	N-ジクロロフルオロメチルチオ-N,N'-ジメチル-N-バラ-トリルスルファミド(別名トリルフルアニド)	731-27-1	標的臓器/全身毒性(反復暴露)	区分1(呼吸器系)	健康有害性	危険	長期又は反復暴露による臓器(呼吸器系)の障害		ラットに4週間吸入ばく露により0.05 mg/L/6hr(90日ばく露換算:0.015 mg/L/6hr)で呼吸困難、異常呼吸音等の症状とともに死亡例が発生し、また、病理組織学的には鼻腔前部の扁平化生と角化、喉頭の扁平化生、気管の上皮脱落と円形細胞浸潤、気管支周囲と肺の線維化等が観察され、一部の所見は0.01~0.004 mg/L(90日ばく露換算:0.003~0.001 mg/L)の用量まで認められた(JMPR(2002))。これらの呼吸器系に対する影響はいずれもガイダンス値区分1に該当する用量で発現していることから区分1(呼吸器系)とした。 一方、終口ばく露ではラットに3ヵ月、13週、2年、105週混餌投与した4試験、イスに92日、52週、52週混餌あるいはカプセル投与した3試験、マウスに105週混餌投与した1試験があり、いずれの試験もガイダンス値範囲内に該当する用量では重大な毒性影響を示さず(JMPR(2002))。さらにラットの3ヵ月、13週および2年の各試験ではガイダンス値上限以上の用量で重大な毒性影響が認められていない(JMPR(2002))。なお、マウスの105週間投与試験のガイダンス値範囲を超えた用量で、肝臓における好塩基性核内封入体およびリンパ組織球増多、腎臓で尿細管上皮の空胞化が認められている(JMPR(2002))。 また、経皮ばく露ではウサギに3週間投与により、皮膚適用部位への影響を除き高用量群の300 mg/kg/day(90日補正:約70 mg/kg/day)でも全身毒性の発現はなかった(JMPR(2002))と報告されているが、この結果のみではデータ不足で分類できない。		区分1(呼吸器系)	健康有害性	危険	長期又は反復暴露による臓器(呼吸器系)の障害		ラットに4週間吸入ばく露により0.05 mg/L/6hr(90日ばく露換算:0.015 mg/L/6hr)で呼吸困難、異常呼吸音等の症状とともに死亡例が発生し、また、病理組織学的には鼻腔前部の扁平化生と角化、喉頭の扁平化生、気管の上皮脱落と円形細胞浸潤、気管支周囲と肺の線維化等が観察され、一部の所見は0.01~0.004 mg/L(90日ばく露換算:0.003~0.001 mg/L)の用量まで認められた(JMPR(2002))。これらの呼吸器系に対する影響はいずれもガイダンス値区分1に該当する用量で発現していることから区分1(呼吸器系)とした。 一方、終口ばく露ではラットに3ヵ月、13週、2年、105週混餌投与した4試験、イスに92日(混餌)、52週(カプセル)、および52週(カプセル)終口投与した3試験、マウスに105週混餌投与した1試験があり、いずれの試験もガイダンス値範囲内に該当する用量では重大な毒性影響を示さず(JMPR(2002))。さらにラットの3ヵ月、13週および2年の各試験ではガイダンス値上限以上の用量で重大な毒性影響が認められていない(JMPR(2002))。なお、マウスの105週間投与試験のガイダンス値範囲を超えた用量で、肝臓における好塩基性核内封入体およびリンパ組織球増多、腎臓で尿細管上皮の空胞化が認められている(JMPR(2002))。 また、経皮ばく露ではウサギに3週間投与により、皮膚適用部位への影響を除き高用量群の300 mg/kg/day(90日補正:約70 mg/kg/day)でも全身毒性の発現はなかった(JMPR(2002))と報告されているが、この結果のみではデータ不足で分類できない。	2013.10修正
20A2217	五酸化りん	1314-56-3	標的臓器/全身毒性(反復暴露)	分類できない	-	-	-		ラットに0.2 mg/L濃度で10日間暴露すると気管支に機能的、形態的变化とあるが(RTECS(2008))、暴露期間が短く、リス3のデータであることからデータ不足で分類できないとした。		分類できない	-	-	-		ラットに0.2 mg/L濃度で10日間暴露すると気管支に機能的、形態的变化とあるが(RTECS(2008))、暴露期間が短く、リス3のデータであることからデータ不足で分類できないとした。	2013.10修正
20A2222	5-アミノ-4-クロロ-2-フェニルピリダジン-3(2H)-オン(別名クロリダゾン)	1698-60-8	標的臓器/全身毒性(反復暴露)	分類できない	-	-	-		ラットを用いた35日間混餌試験(300-19200ppm、90日換算 9.7-622 mg/kg bw)において、全投与群で肝臓絶対および相対重量の増加、臨床化学項目(グルコース減少、ビリルビン増加など)の影響しかみられなかった(IUCLID(2000))。また、イスを用いた3ヶ月間混餌試験(100-10000ppm、2.4-326.6mg/kg)においても臓器重量と臨床化学項目の変化が326.6mg/kgだけにみられたことから(IUCLID(2000))が区分外(終口)に相当するが、他経路の情報がなく分類できないとした。		分類できない	-	-	-		ラットを用いた35日間混餌試験(300-19200ppm、90日換算 9.7-622 mg/kg bw)において、全投与群で肝臓絶対および相対重量の増加、臨床化学項目(グルコース減少、ビリルビン増加など)の影響しかみられなかった(IUCLID(2000))。また、イスを用いた3ヶ月間混餌試験(100-10000ppm、2.4-326.6mg/kg)においても臓器重量と臨床化学項目の変化が326.6mg/kgだけにみられたことから(IUCLID(2000))が区分外(終口)に相当するが、他経路の情報がなく分類できないとした。	2013.10修正
20A2226	1-ドデシルグアニジニウム=アセート(別名ドジン)	2439-10-3	発がん性	区分外	-	-	-		ラットを用いた106週間の経口投与試験で雄で肝臓腫と癌腫が用量に依存して見られ(JMPR(2000))。また、マウスを用いた78週間の経口投与試験で雄の肝細胞性腺腫と混合性肝細胞腺腫/肝細胞がんの発生率の上昇が観察されたが(JMPR(2000))、結論として以上の発がんのリスクはないと結論していることから区分外とした。		区分外	-	-	-		ラットを用いた106週間の経口投与試験で雄で肝臓腫と癌腫が用量に依存して見られ(JMPR(2000))。また、マウスを用いた78週間の経口投与試験で雄の肝細胞性腺腫と混合性肝細胞腺腫/肝細胞がんの発生率の上昇が観察されたが(JMPR(2000))、結論として以上の発がんのリスクはないと結論していることから区分外とした。	2013.10修正
20A2230	ペンタエリスリトールトリアクリレート	3524-68-3	自然発火性固体	分類できない	-	-	-		発火点は引火点よりも高く、引火点が>110°C[GESTIS(access on 11/2008)]で、70°Cを超えている。		区分外	-	-	-		データなし。	2013.10修正
20A2230	ペンタエリスリトールトリアクリレート	3524-68-3	発がん性	分類できない	-	-	-		マウスを用いたアクリル酸エリスリトール(pentaerythritol triacrylate 25%, tetraacrylate 65%, diacrylate applied 10%)を15%の濃度で含むアセトン溶液3mgを週3回塗布した経皮試験において皮膚の腫瘍は認められていない(NTP GMM, No. 4(2005))。別のマウスを用いたアクリル酸エリスリトールの経皮試験において肝臓の腫瘍の発生率が上昇しているが、判定できないとしている(NTP GMM, No. 4(2005))。マウスを用いたpentaerythritol triacrylateを5%の濃度で含むホワイトミネルオイル溶液2.5mgを80日間塗布した経皮試験において皮膚の腫瘍は認められていないが、皮膚扁平上皮細胞癌、脾臓のリンパ腫または、リンパ節転移への誘導が報告されている。EPAはこれらの発がん性を限定的証拠としている(NTP GMM, No. 4(2005))。いずれの試験もマウスでの発がん性の証拠は限定的であり、他の動物種でのデータがないので分類できないとした。		分類できない	-	-	-		マウスを用いたアクリル酸エリスリトール(pentaerythritol triacrylate 25%, tetraacrylate 65%, diacrylate applied 10%)を15%の濃度で含むアセトン溶液3mgを週3回塗布した経皮試験において皮膚の腫瘍は認められていない(NTP GMM, No. 4(2005))。別のマウスを用いたアクリル酸エリスリトールの経皮試験において肝臓の腫瘍の発生率が上昇しているが、判定できないとしている(NTP GMM, No. 4(2005))。マウスを用いたpentaerythritol triacrylateを5%の濃度で含むホワイトミネルオイル溶液2.5mgを80日間塗布した経皮試験において皮膚の腫瘍は認められていないが、皮膚扁平上皮細胞癌、脾臓のリンパ腫または、リンパ節転移への誘導が報告されている。EPAはこれらの発がん性を限定的証拠としている(NTP GMM, No. 4(2005))。いずれの試験もマウスでの発がん性の証拠は限定的であり、他の動物種でのデータがないので分類できないとした。	2013.10修正

物質ID	物質名	CAS番号	項目	修正前					修正後					備考	
				分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き		分類根拠・問題点
20A2232	ペンタエリスリトールテトラアクリレート	4986-89-4	皮膚腐食性/刺激性	分類できない	—	—	—	—	データなし。なお、なお、EU分類ではXi:R36/38 [Irritating to eyes and skin]になっている。	分類できない	—	—	—	データなし。なお、EU分類ではXi:R36/38 [Irritating to eyes and skin]になっている。	2013.10修正
20A2233	(4R)-バラ-メンタ-1,8-ジエン(別名:d-リモネン)	5989-27-5	引火性液体	区分3	炎	警告	引火性液体及び蒸気	—	引火点48°C (closed cup) (HSDB (2006), ICSC (2005), ICSC(J) (2005))に基づいて、 にされた 。UNRTDGIII(UNRTDG, Rev.15, 2007)である。	区分3	炎	警告	引火性液体及び蒸気	引火点48°C (closed cup) (HSDB (2006), ICSC (2005), ICSC(J) (2005))に基づいて、 区分3にされた 。UNRTDGIII(UNRTDG, Rev.15, 2007)である。	2013.10修正
20A2235	ジナトリウム ジオキシド(オキソ)シラン;メタけい酸ナトリウム	6834-92-0	呼吸器感作性または皮膚感作性	—	—	—	—	—	(呼吸器感作性)データなし(皮膚感作性)マウスのLLNA法(OECD-Guideline 429)で陰性の結果および接触による蕁麻疹の一人の症例報告とその人のパッチテストで潰瘍と膨疹の報告(対照の30人は陰性)があるが(access on 12 2008)、データ不足で分類できない。	呼吸器感作性;分類できない皮膚感作性;分類できない	—	—	—	(呼吸器感作性)データなし(皮膚感作性)マウスのLLNA法(OECD-Guideline 429)で陰性の結果および接触による蕁麻疹の一人の症例報告とその人のパッチテストで潰瘍と膨疹の報告(対照の30人は陰性)があるが(SIDS(access on Dec. 2008))、データ不足で分類できない。	2013.10修正
20A2235	ジナトリウム ジオキシド(オキソ)シラン;メタけい酸ナトリウム	6834-92-0	生殖細胞変異原性	区分外	—	—	—	—	マウスの 骨髄 を用いた染色体異常試験(体細胞 in vivo 変異原性試験)の陰性結果に基づき(SIDS (access on 12 2008))、 区分外とした 。なお、in vitro変異原性試験(ネームス試験)も陰性結果(SIDS (access on 12 2008))が得られている。	区分外	—	—	—	マウスの 骨髄細胞 を用いた染色体異常試験(体細胞 in vivo 変異原性試験)の陰性結果に基づき(SIDS (access on 12 2008))、 区分外とした 。なお、in vitro変異原性試験(ネームス試験)も陰性結果(SIDS (access on 12 2008))が得られている。	2013.10修正
20A2235	ジナトリウム ジオキシド(オキソ)シラン;メタけい酸ナトリウム	6834-92-0	標的臓器/全身毒性(反復暴露)	分類できない	—	—	—	—	ラットを用いた3ヶ月間の飲水による経口投与試験(OECD TG408と同様の試験(用量:200, 600, 1800 ppm (雄:26.4, 76.2, 227.1 mg/kg/day, 雌:32.1, 97.6, 237.2 mg/kg/day))においてNOAELはガイドランスの区分2を超える> 227-237 mg/kg bwとされ投与による影響は見られていない。他のラットを用いた3ヶ月間の飲水による経口投与試験(用量:750, 1500 or 3000 ppm (雄23, 47, 110 mg/day, 雌:21, 37, 84 mg/day))においても(SIDS (access on 12 2008))投与による影響は見られていない。マウスを用いた3ヶ月間の飲水による経口投与試験(用量:雄300, 900, 2700 ppm, 雌333, 1000, 3000 ppm))においてNOAELはガイドランスの区分2を超える 260 = 284 mg/kg bwとされ、最高用量で肝重量の増加、雌の白血球数の減少以外に顕著な影響は認められていない。いずれも区分2のガイドライン値で影響は認められなかったとのデータに基づき区分外とした。	区分外	—	—	—	ラットを用いた3ヶ月間の飲水による経口投与試験(OECD TG408と同様の試験(用量:200, 600, 1800 ppm (雄:26.4, 76.2, 227.1 mg/kg/day, 雌:32.1, 97.6, 237.2 mg/kg/day))においてNOAELはガイドランスの区分2を超える 260 = 284 mg/kg bwとされ、最高用量で肝重量の増加、雌の白血球数の減少以外に顕著な影響は認められていない。いずれも区分2のガイドライン値で影響は認められなかったとのデータに基づき区分外とした。	2013.10修正
20A2237	ウラン	7440-61-1	有機過酸化物	分類対象外	—	—	—	—	酸素又はハロゲンを含まない無機物である。	分類対象外	—	—	—	有機物ではない。	2013.10修正
20A2238	カルシウム	7440-70-2	皮膚腐食性/刺激性	区分1	腐食性	危険	重篤な皮膚の薬傷・眼の損傷	—	"Corrosive. Causes severe eye, mucous m embrane, and skin burns."(NFPA (13th, 2006))との記述、および金属カルシウムが水存在下で水と反応してCa(OH)2(pH=12.4(25°C飽和水溶液))を生成し、Ca(OH)2が皮膚及び眼の炎症を引き起こす(既存分類ID811 (NITE))ことより区分1に分類した。	区分1	腐食性	危険	重篤な皮膚の薬傷・眼の損傷	"Corrosive. Causes severe eye, mucous m embrane, and skin burns."(NFPA (13th, 2006))との記述、および金属カルシウムが水存在下で水と反応してCa(OH)2(pH=12.4(25°C飽和水溶液))を生成し、Ca(OH)2が皮膚及び眼の炎症を引き起こす(既存分類ID811 (NITE))ことより区分1に分類した。	2013.10修正
20A2238	カルシウム	7440-70-2	眼に対する重篤な損傷性/眼刺激性	区分1	腐食性	危険	重篤な眼の損傷	—	"Corrosive. Causes severe eye, mucous m embrane, and skin burns."NFPA (13th, 2006)との記述、および金属カルシウムが水存在下で水と反応してCa(OH)2(pH=12.4(25°C飽和水溶液))を生成し、Ca(OH)2が皮膚及び眼の炎症を引き起こす(既存分類ID811 (NITE))ことより区分1に分類した。	区分1	腐食性	危険	重篤な眼の損傷	"Corrosive. Causes severe eye, mucous m embrane, and skin burns."NFPA (13th, 2006)との記述、および金属カルシウムが水存在下で水と反応してCa(OH)2(pH=12.4(25°C飽和水溶液))を生成し、Ca(OH)2が皮膚及び眼の炎症を引き起こす(既存分類ID811 (NITE))ことより区分1に分類した。	2013.10修正
20A2239	塩化アルミニウム	7446-70-0	急性毒性(吸入:気体)	区分外	—	—	—	—	GHS定義における固体である。	分類対象外	—	—	—	GHS定義における固体である。	2013.10修正
20A2239	塩化アルミニウム	7446-70-0	生殖細胞変異原性	区分2	健康有害性	警告	遺伝性疾患のおそれの疑い	—	マウスの腹腔内投与による骨髄細胞小核試験(体細胞を用いる in vivo 変異原性試験)の陽性結果(ATSDR (2008))に基づいて区分2とした。なお、in vitro 試験では、ヒト末梢リンパ球を用いた染色体異常試験及び小核試験で陽性(ATSDR (2008))、 DNA 、 エームス試験 及び マウスリンフォーママッセイ で陰性の結果(ATSDR (2008))が得られている。	区分2	健康有害性	警告	遺伝性疾患のおそれの疑い	マウスの腹腔内投与による骨髄細胞小核試験(体細胞を用いる in vivo 変異原性試験)の陽性結果(ATSDR (2008))に基づいて区分2とした。なお、in vitro 試験では、ヒト末梢リンパ球を用いた染色体異常試験及び小核試験で陽性(ATSDR (2008))、 エームス試験 及び マウスリンフォーママッセイ で陰性の結果(ATSDR (2008))が得られている。	2013.10修正
20A2240	水素化ナトリウム	7646-69-7	可燃性/引火性ガス	分類できない	—	—	—	—	GHSの定義における固体である。	分類対象外	—	—	—	GHSの定義における固体である。	2013.10修正
20A2240	水素化ナトリウム	7646-69-7	支燃性/酸化性ガス	分類できない	—	—	—	—	GHSの定義における固体である。	分類対象外	—	—	—	GHSの定義における固体である。	2013.10修正

物質ID	物質名	CAS番号	項目	修正前					修正後					備考		
				分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き		分類結果・問題点	
20A2240	水素化ナトリウム	7646-69-7	高压ガス	分類できない	—	—	—	—	GHSの定義における固体である。	分類対象外	—	—	—	—	GHSの定義における固体である。	2013.10修正
20A2241	塩化コバルト(II)	7646-79-9	急性毒性(経口)	区分4	感嘆符	警告	飲み込むと有害	—	ラットのLD50値 42.4mg/kg bw, 358mg/kg/day, 418mg/kg (ATSDR (2004))に基づき、データ数の多い区分4とした。なおEU分類にてR22(区分3または4)(EU-Annex I (access on 1. 2009))である。	区分4	感嘆符	警告	飲み込むと有害	—	ラットのLD50値 42.4mg/kg bw, 358mg/kg/day, 418mg/kg (ATSDR (2004))に基づき、データ数の多い区分4とした。なおEU分類にてR22(区分3または4)(EU-Annex I (access on 1. 2009))である。	2013.10修正
20A2241	塩化コバルト(II)	7646-79-9	急性毒性(経皮)	分類できない	—	—	—	—	ラットにおけるLDLo値 2000mg/kg (RTECS (2008))に基づき、JIS分類基準の区分外(国連分類基準は区分5または区分外)とした。	区分外	—	—	—	—	ラットにおけるLDLo値 2000mg/kg (RTECS (2008))に基づき、JIS分類基準の区分外(国連分類基準は区分5または区分外)とした。	2013.10修正
20A2241	塩化コバルト(II)	7646-79-9	標的臓器/全身毒性(単回暴露)	区分1(呼吸器、神経系、血液)	健康有害性	危険	臓器(呼吸器、神経系、血液)の障害	—	ヒトにおいては、19ヶ月の男児が本物質溶液(用量不明)を飲み込み、嘔吐および処置を施されたが6.5時間後に死亡した例(ATSDR (2004))がある。また、子供に赤血球の生成の抑制によるチアノーゼ、昏睡および死に至ると記述がある(HSDB (2004))。本物質による影響には胸骨後に痛み、耳鳴り、吐き気および嘔吐、神経性難聴、気管圧迫を伴う甲状腺過形成、粘液水腫、倦怠感などが記述されている(HSDB (2004))。ラットによる強制経口試験では4.25mg/kgにて自発運動の低下が見られた(ATSDR (2004))。以上、ヒトの死亡例に基づき区分1(全身毒性)とした。	区分1(全身毒性)	健康有害性	危険	臓器(全身毒性)の障害	—	ヒトにおいては、19ヶ月の男児が本物質溶液(用量不明)を飲み込み、嘔吐および処置を施されたが6.5時間後に死亡した例(ATSDR (2004))がある。また、子供に赤血球の生成の抑制によるチアノーゼ、昏睡および死に至ると記述がある(HSDB (2004))。本物質による影響には胸骨後に痛み、耳鳴り、吐き気および嘔吐、神経性難聴、気管圧迫を伴う甲状腺過形成、粘液水腫、倦怠感などが記述されている(HSDB (2004))。ラットによる強制経口試験では4.25mg/kgにて自発運動の低下が見られた(ATSDR (2004))。以上、ヒトの死亡例に基づき区分1(全身毒性)とした。	2013.10修正
20A2244	酸素	7782-44-7	生殖毒性	区分2	健康有害性	警告	生殖能又は胎児への悪影響のおそれの疑い	—	ハムスター及びウサギにおける器管形成期の高圧酸素暴露試験で、高濃度の酸素を吸入させたハムスターにおいて、膈ヘルニア、脳脱出、脊髄破裂、股欠損が見られ(Birth Defects (3rd, 2000))、ウサギにおいては、融解吸収、奇形、眼球欠損、多発する胎仔死、低発生率の未熟児(Birth Defects (3rd, 2000))が認められていることから区分2とした。なお、親動物の性機能および生殖能に関するデータはない。	区分2	健康有害性	警告	生殖能又は胎児への悪影響のおそれの疑い	—	ハムスター及びウサギにおける器管形成期の高圧酸素暴露試験で、高濃度の酸素を吸入させたハムスターにおいて、膈ヘルニア、脳脱出、脊髄破裂、股欠損が見られ(Birth Defects (3rd, 2000))、ウサギにおいては、融解吸収、奇形、眼球欠損、多発する胎仔死、低発生率の未熟児(Birth Defects (3rd, 2000))が認められていることから区分2とした。なお、親動物の性機能および生殖能に関するデータはない。	2013.10修正
20A2244	酸素	7782-44-7	標的臓器/全身毒性(単回暴露)	区分3(気道刺激性)	感嘆符	警告	呼吸器への刺激のおそれ	—	ラットに100%濃度の酸素をばく露すると24時間で気管支と血管の収縮が見られ(PATTY (5th, 2001))、ウサギに100%濃度の酸素をばく露すると24時間~96時間において肺容積の減少、リン脂質の減少(表面活性物質)、肺水腫が認められ(PATTY (5th, 2001))。ラットに95%濃度の酸素をばく露すると12時間で表面活性物質の減少が認められているが(PATTY (5th, 2001))、いずれもガイダンスの範囲を超える用量で見られている。ヒトにおいては95%濃度の酸素をばく露して4時間以内に発咳が認められており(PATTY (5th, 2001))。また、90~95%濃度の酸素をばく露すると3時間以内に発咳が認められている(HSDB(2007))ことから、区分3(気道刺激性)とした。なお高圧酸素との関連が指摘されているものとして、視力の喪失、視野狭窄などがある(PATTY (5th, 2001))。	区分3(気道刺激性)	感嘆符	警告	呼吸器への刺激のおそれ	—	ラットに100%濃度の酸素をばく露すると24時間で気管支と血管の収縮が見られ(PATTY (5th, 2001))、ウサギに100%濃度の酸素をばく露すると24時間~96時間において肺容積の減少、リン脂質の減少(表面活性物質)、肺水腫が認められ(PATTY (5th, 2001))。ラットに95%濃度の酸素をばく露すると12時間で表面活性物質の減少が認められているが(PATTY (5th, 2001))、いずれもガイダンスの範囲を超える用量で見られている。ヒトにおいては95%濃度の酸素をばく露して4時間以内に発咳が認められており(PATTY (5th, 2001))。また、90~95%濃度の酸素をばく露すると3時間以内に発咳が認められている(HSDB(2007))ことから、区分3(気道刺激性)とした。なお高圧酸素との関連が指摘されているものとして、視力の喪失、視野狭窄などがある(PATTY (5th, 2001))。	2013.10修正
20A2245	弗化カリウム	7789-23-3	酸化性固体	分類できない	—	—	—	—	分類対象外にならないもので、TDG分類されないもので「分類できない」とした。	分類できない	—	—	—	—	データがなく分類できない。	2013.10修正
20A2246	ペテロラタム	8009-03-8	爆発物	分類できない	—	—	—	—	不純物が含まれているためにデータがないので分類できない。	分類できない	—	—	—	—	水素化精製過程で炭化水素からの窒素・酸素のアンモニア・水としての解離、不飽和結合の飽和、さらに金属分の触媒上への沈着分離が起こるため爆発性に関わる原子団を含まない。	2013.10修正
20A2246	ペテロラタム	8009-03-8	皮膚腐食性/刺激性	区分外	—	—	—	—	PATTY (5th, 2001)で刺激性はなく皮膚試験のvehicleとして使用されるとの記載がありことから区分外とした。	区分外	—	—	—	—	PATTY (5th, 2001)で刺激性はなく皮膚試験のvehicleとして使用されるとの記載があることから区分外とした。	2013.10修正
20A2248	リグロイン(低沸点ナフサ)	8032-32-4	急性毒性(経口)	区分外	—	—	—	—	ラットにおける2つのLD50値 >25.0 mL/Kg (比重 0.635 (Sax 11th, 2004)より換算値 >15875 mg/kg 体重)(いずれもEHC 20, 1982)に基づき、区分外とした。	区分外	—	—	—	—	ラットにおけるLD50値 >25.0 mL/Kg (比重 0.635 (Sax 11th, 2004)より換算値 >15875 mg/kg 体重)(いずれもEHC 20, 1982)に基づき、区分外とした。	2013.10修正
20A2248	リグロイン(低沸点ナフサ)	8032-32-4	急性毒性(経皮)	区分外	—	—	—	—	ウサギにおける2つのLD50値(4h) >5.0 mL/Kg (比重 0.635 (Sax 11th, 2004)より換算値 >3175 mg/kg 体重)(いずれもEHC 20, 1982)に基づき、区分外とした。なお、国連分類の区分5に該当するかどうかは不明である。	区分外	—	—	—	—	ウサギにおけるLD50値(4h) >5.0 mL/Kg (比重 0.635 (Sax 11th, 2004)より換算値 >3175 mg/kg 体重)(いずれもEHC 20, 1982)に基づき、区分外とした。なお、国連分類の区分5に該当するかどうかは不明である。	2013.10修正

物質ID	物質名	CAS番号	項目	修正前							修正後							備考
				分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類根拠・問題点	分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類根拠・問題点			
20A2249	テトラクロロシラン	10026-04-7	標的臓器/全身毒性(単回暴露)	区分2(呼吸器系)	健康有害性	警告	臓器(呼吸器系)の障害のおそれ		プラント作業者6名の暴露において肺の障害との記述があり(IUCLID(2000))、また、ARDSRADS(気道機能への反応で機能不全をもたらす症候)(HSDB(2002))の記述から区分1相当であるが、リスト2からのデータなので区分2(呼吸器系)とした。	区分2(呼吸器系)	健康有害性	警告	臓器(呼吸器系)の障害のおそれ		プラント作業者6名の暴露において肺の障害との記述があり(IUCLID(2000))、また、ARDSRADS(気道機能障害症候群)(HSDB(2002))の記述から区分1相当であるが、リスト2からのデータなので区分2(呼吸器系)とした。	2013.10修正		
20A2250	硫酸ビス(ヒドロキシシランアンモニウム)	10039-54-0	急性毒性(経皮)	区分4	感嘆符	警告	皮膚に接触すると有害		ラットのLD50値 >200、>500 mg/kg bw(OECD TG 402: GLP)、100-500、>500、1500-2000 mg/kg/bw (OECD TG 402: GLP)(いずれもIUCLID(2000))のうち、ウサギLC50=100-500、1500-2000 mg/kg/bwのは、区分2-3と区分4に分かれている。どちらもOECD TG-402のGLP試験であるが、LC50=100-500mg/kgはプラスチックカバー(テストガイドライン逸脱を用いた場合のデータであり、同時に行ったテストガイドライン通りのガーゼカバーを用いた試験では100から1000mg/kgの用量で死亡は認められていない、このことから1500-2000 mg/kg/bwを採用して、区分4とした。	区分4	感嘆符	警告	皮膚に接触すると有害		LD50値は、ラットで >200 mg/kgおよび >500 mg/kg、ウサギで 100-500 mg/kg、1500-2000 mg/kgおよび >400 mg/kg(以上全て IUCLID(2000))と報告されている。これらの中でガイドライン(OECD TG402、GLP)に準拠した試験データであるラットのLD50値 >500 mg/kgおよびウサギのLD50値 1500-2000 mg/kgに基づき、区分4とした。	2013.10修正		
20A2255	エチル 3-フェニルカルバミルオキシカルバニラート(別名デスメジファ)	13684-56-5	自己発熱性物質および混合物	分類対象外	-	-	-		融点が140℃以下の固体に適した試験法が確立していない。	分類できない	-	-	-		融点が140℃以下の固体に適した試験法が確立していない。	2013.10修正		
20A2255	エチル 3-フェニルカルバミルオキシカルバニラート(別名デスメジファ)	13684-56-5	急性毒性(吸入: 粉塵、ミスト)	分類できない	-	-	-		ラットのLC50値 >7.4mg/L(Gangolli(2nd Ed. 1999))のデータがあるが、リスト3のデータであることから分類できないとした。より区分外とした。なお、飽和蒸気圧濃度は 4.82×10^{-8} mg/Lであり、試験は粉塵で試験されたと判断した。	分類できない	-	-	-		ラットのLC50値 >7.4mg/L(Gangolli(2nd Ed. 1999))のデータがあるが、リスト3のデータであることから分類できないとした。なお、飽和蒸気圧濃度は 4.82×10^{-8} mg/Lであり、試験は粉塵で試験されたと判断した。	2013.10修正		
20A2278	トリプロピレングリコールジアクリレート	42978-66-5	水生環境有害性(長期間)	区分2	環境	-	長期的影響により水生生物に毒性		急性毒性区分2であり、信頼性のある急速分解性データがないことから、区分外とした。	区分2	環境	-	長期的影響により水生生物に毒性		急性毒性区分2であり、信頼性のある急速分解性データがないことから、区分2とした。	2013.10修正		
20A2285	石油留分	64742-47-8	酸化性液体	分類できない	-	-	-		水素化精製過程で炭化水素からの酸素の水としての解離、さらに金属分の触媒上への沈着分離が起こるため酸素又はハロゲンを含まない。	分類対象外	-	-	-		水素化精製過程で炭化水素からの酸素の水としての解離、さらに金属分の触媒上への沈着分離が起こるため酸素又はハロゲンを含まない。	2013.10修正		
20A2288	石油留分	64742-54-7	酸化性液体	分類対象外	-	-	-		酸素、フッ素または塩素を含んでいないか、またはこれらの元素が炭素、水素以外の元素と化学結合しているものがない。	分類対象外	-	-	-		酸素、フッ素または塩素を含まない有機化合物である。	2013.10修正		
20A2289	石油留分	64742-55-8	急性毒性(吸入: 気体)	分類できない	-	-	-		GHSの定義における液体である。	分類対象外	-	-	-		GHSの定義における液体である。	2013.10修正		
20A2291	石油留分	64742-94-5	水生環境有害性(長期間)	区分1	環境	警告	長期的影響により水生生物に非常に強い毒性		急性毒性区分2であり、急速分解性を示すデータが無いことから区分1とした。	区分1	環境	警告	長期的影響により水生生物に非常に強い毒性		急性毒性区分1であり、急速分解性を示すデータが無いことから区分1とした。	2013.10修正		
20A2296	(RS)-アルファシアノ-4-フルオロ-3-フェノキシベンジル=(1RS)-シス-トランス-3-(2,2-ジクロロビニル)-2,2-ジメチルシクロプロパンカルボキシラート(別名シフルリン)	68359-37-5	急性毒性(経皮)	区分外	-	-	-		ラットLD値 =>5000 mg/kg (JECFA No. 891 (1997))に基づき、JIS分類基準の区分外(国連分類基準の区分5)とした。	区分外	-	-	-		ラットLD50値 =>5000 mg/kg (JECFA No. 891 (1997))に基づき、JIS分類基準の区分外(国連分類基準の区分5)とした。	2013.10修正		
20A2300	2-メチル-1-[4-(メチルチオ)フェニル]-2-モルホリノプロパン-1-オン(別名: イルガ)	71868-10-5	金属腐食性物質	分類対象外	-	-	-		固体状の物質に適した試験方法が確立していない。	分類できない	-	-	-		固体状の物質に適した試験方法が確立していない。	2013.10修正		

物質ID	物質名	CAS番号	項目	修正前					修正後					備考		
				分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き		分類根拠・問題点	
20A2302	(4RS,5RS)-5-(4-クロロフェニル)-N-シクロヘキシル-4-メチル-2-オキソ-1,3-チアゾリジン-3-カルボキサミド(別名ヘキシチアゾクス)	78587-05-0	標的臓器/全身毒性(反復暴露)	分類できない	-	-	-	-	ラットを用いた13週間の経口(混餌)投与試験で、ガイダンスの区分2に相当する500ppm(25mg/kg)の用量以上で血液学的パラメータの変化と生化学値の変化、中心帯の肝細胞の腫脹がガイダンスの区分2を超える3500ppm(175mg/kg)で雄・雌両方に観察され、副腎皮質の束状帯の脂肪変性がガイダンスの区分2に相当する500ppm(25mg/kg)で雄・雌両方に観察されている(JMPR(1991)、IRIS(2002)、農業安全情報(農業時代154号1999))。また、脳及び赤血球コリンエステラーゼ(ChE)に異常はなかったが、500と3500ppmで雌の血漿コリンエステラーゼの減少が見られている(IRIS(2002)、農業安全情報(農業時代154号1999))。マウスの28日間の経口(混餌)投与試験において、肝細胞腫大が雄の1800ppm(90日換算値:90mg/kg)以上と雌の10800ppm(90日換算値:540mg/kg)で観察されている(JMPR(1991))、 農業安全情報(農業時代154号1999) (農業安全情報(農業時代154号1999))。肝臓における肝細胞の腫脹変化と副腎皮質における束状帯の脂肪変性以外に顕著な影響は見られないが、区分外にするには他に情報がなく分類できないとした。	分類できない	-	-	-	-	ラットを用いた13週間の経口(混餌)投与試験で、ガイダンスの区分2に相当する500ppm(25mg/kg)の用量以上で血液学的パラメータの変化と生化学値の変化、中心帯の肝細胞の腫脹がガイダンスの区分2を超える3500ppm(175mg/kg)で雄・雌両方に観察され、副腎皮質の束状帯の脂肪変性がガイダンスの区分2に相当する500ppm(25mg/kg)で雄・雌両方に観察されている(JMPR(1991)、IRIS(2002)、農業安全情報(農業時代154号1999))。また、脳及び赤血球コリンエステラーゼ(ChE)に異常はなかったが、500と3500ppmで雌の血漿コリンエステラーゼの減少が見られている(IRIS(2002)、農業安全情報(農業時代154号1999))。マウスの28日間の経口(混餌)投与試験において、肝細胞腫大が雄の1800ppm(90日換算値:90mg/kg)以上と雌の10800ppm(90日換算値:540mg/kg)で観察されている(JMPR(1991))、 農業安全情報(農業時代154号1999) (農業安全情報(農業時代154号1999))。肝臓における肝細胞の腫脹変化と副腎皮質における束状帯の脂肪変性以外に顕著な影響は見られないが、区分外にするには他に情報がなく分類できないとした。	2013.10修正
20A2307	2-(4-クロロフェニル)-2-(1H-1,2,4-トリアゾール-1-イルメチル)ヘキサニトリル	88671-89-0	酸性性固体	分類できない	-	-	-	-	酸素を含まず、塩素を含む有機化合物であるが、この塩素は炭素以外の元素と化学結合していない。	分類対象外	-	-	-	-	酸素を含まず、塩素を含む有機化合物であるが、この塩素は炭素以外の元素と化学結合していない。	2013.10修正
20A2311	(RS)-1-[2,5-ジクロロ-4-(1,1,2,3,3,3-ヘキサフルオロプロポキシ)フェニル]-3-(2,6-ジフルオロプロピル)ピロリジン	103055-07-8	発がん性	区分外	-	-	-	-	ラット及びマウスを用いた混餌投与による発がん性試験において、発がん性は認められない(農業安全情報 食品衛生研究 vol.51 No.10(2001))ことから区分外に該当するが、リスト2のデータであることから分類できないとした。	分類できない	-	-	-	-	ラット及びマウスを用いた混餌投与による発がん性試験において、発がん性は認められない(農業安全情報 食品衛生研究 vol.51 No.10(2001))ことから区分外に該当するが、リスト2のデータであることから分類できないとした。	2013.10修正
20A2315	(RS)-2-(2,4-ジクロロフェニル)-3-(1H-1,2,4-トリアゾール-1-イル)プロピル=1,1,2,2-テトラフルオロエチ	112281-77-3	酸性性液体	分類できない	-	-	-	-	酸素及びハロゲン原子を含むが、これらは炭素又は水素原子以外には結合していない。	分類対象外	-	-	-	-	酸素及びハロゲン原子を含むが、これらは炭素又は水素原子以外には結合していない。	2013.10修正
20A2315	(RS)-2-(2,4-ジクロロフェニル)-3-(1H-1,2,4-トリアゾール-1-イル)プロピル=1,1,2,2-テトラフルオロエチ	112281-77-3	標的臓器/全身毒性(反復暴露)	区分1(肝臓)	健康有害性	危険	長期又は反復暴露による臓器(肝臓)の障害	-	ラットを用いた4週間の経口投与試験において、200mg/kg投与群で血液生化学検査で 以上 が、肝臓重量の増加が見られた。ラットを用いた4週間の混餌投与試験において160ppm以上の投与群で小葉中心、中間域肝細胞の腫大、2500ppm投与群で小葉中心、中間域肝細胞の空泡化が見られた。ラットを用いた13週間の混餌投与試験において360ppm雄雌、60ppm(ガイダンス区分1内)雌で肝臓重量の増加、小葉中心肝細胞の肥大が見られた。マウスを用いた13週間の混餌投与試験において25ppm投与以上の群で小葉中心肝細胞肥大の重症度、出現率の増加、625ppm投与群の雌に肝臓中間域の空泡化が見られた。625ppm投与群の雄雌、125ppm投与群の雌に肝臓に単細胞壊死が顕著であり、壊死が見られた。625、125ppm投与群の雄雌で肝臓に単細胞変性が見られた。ウサギを用いた21日間の経皮投与試験においては投与部位の刺激性による変化のみが見られた。イヌを用いた12ヶ月の混餌投与試験において360ppm投与群に肝臓の肥大、腎臓皮質尿管の肥大が見られた(いずれも(HSDB(2009))。以上の報告よりList2の報告のみではあるが、ラットとマウスの試験で区分1のガイダンス値内の濃度で肝臓に異常が出ているため区分1(肝臓)とした。	区分1(肝臓)	健康有害性	危険	長期又は反復暴露による臓器(肝臓)の障害	-	ラットを用いた4週間の経口投与試験において、200mg/kg投与群で血液生化学検査で 異常 が、肝臓重量の増加が見られた。ラットを用いた4週間の混餌投与試験において160ppm以上の投与群で小葉中心、中間域肝細胞の腫大、2500ppm投与群で小葉中心、中間域肝細胞の空泡化が見られた。ラットを用いた13週間の混餌投与試験において360ppm雄雌、60ppm(ガイダンス区分1内)雌で肝臓重量の増加、小葉中心肝細胞の肥大が見られた。マウスを用いた13週間の混餌投与試験において25ppm投与以上の群で小葉中心肝細胞肥大の重症度、出現率の増加、625ppm投与群の雌に肝臓中間域の空泡化が見られた。625ppm投与群の雄雌、125ppm投与群の雌に肝臓に単細胞壊死が顕著であり、壊死が見られた。625、125ppm投与群の雄雌で肝臓に単細胞変性が見られた。ウサギを用いた21日間の経皮投与試験においては投与部位の刺激性による変化のみが見られた。イヌを用いた12ヶ月の混餌投与試験において360ppm投与群に肝臓の肥大、腎臓皮質尿管の肥大が見られた(いずれも(HSDB(2009))。以上の報告よりList2の報告のみではあるが、ラットとマウスの試験で区分1のガイダンス値内の濃度で肝臓に異常が出ているため区分1(肝臓)とした。	2013.10修正
20A2316	(RS)-4-(4-クロロフェニル)-2-フェニル-2-(1H-1,2,4-トリアゾール-1-イルメチル)プロピルニトリル(別名フェンプロナゾール)	114369-43-6	急性毒性(経口)	区分外	-	-	-	-	ラットのLD50値の報告が3件(>2000、>2,000、>5000mg/kg)(JMPR(21997))あり、いずれも区分外に該当する。	区分外	-	-	-	-	ラットのLD50値の報告が3件(>2000、>2,000、>5000mg/kg)(JMPR(1997))あり、いずれも区分外に該当する。	2013.10修正

物質ID	物質名	CAS番号	項目	修正前					修正後					備考		
				分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き		分類根拠・問題点	
20A2316	(RS)-4-(4-クロロフェニル)-2-フェニル-2-(1H-1,2,4-トリアゾール-1-イルメチル)ピロニドニル(別名フェンブコナゾール)	114369-43-6	呼吸器感作性または皮膚感作性	呼吸器感作性・分類できない 皮膚感作性・区分外	—	—	—	注意書き	(呼吸器感作性)データなし。 (皮膚感作性)モルモットを用いたBuehler testで陰性(showed no potential for skin sensitization)(JMPR(1997))。モルモットを用いたmaximization testでアゼトン溶液の使用では、陽性率10%(陰性対照:40%)、ジエチルフラレート溶液で陽性率16%(陰性対照:10%)で弱い陽性(weak sensitizing potential)(JMPR(1997))。モルモットを使用したmaximization testでアゼトン、エタノールのいずれを使用した場合も陽性率0%で陰性であった(農薬抄録(農薬抄録 評価書(2007))。以上3件の報告より区分外とした。	呼吸器感作性・分類できない 皮膚感作性・区分外	—	—	—	注意書き	(呼吸器感作性)データなし。 (皮膚感作性)モルモットを用いたBuehler testで陰性(showed no potential for skin sensitization)(JMPR(1997))。モルモットを用いたmaximization testでアゼトン溶液の使用では、陽性率10%(陰性対照:40%)、ジエチルフラレート溶液で陽性率16%(陰性対照:10%)で弱い陽性(weak sensitizing potential)(JMPR(1997))。モルモットを使用したmaximization testでアゼトン、エタノールのいずれを使用した場合も陽性率0%で陰性であった(農薬抄録(農薬抄録 評価書(2007))。以上3件の報告より区分外とした。	2013.10修正
20A2316	(RS)-4-(4-クロロフェニル)-2-フェニル-2-(1H-1,2,4-トリアゾール-1-イルメチル)ピロニドニル(別名フェンブコナゾール)	114369-43-6	標的臓器/全身毒性(反復暴露)	区分2(肝臓)	健康有害性	危険	長期又は反復暴露による臓器(肝臓)の障害のおそれ	注意書き	マウスを使用した混餌投与による3ヶ月の試験で区分2のガイドランス値内の投与群(33~54mg/kg)で肝細胞肥大、肝臓単細胞壊死が見られた。この濃度以上で肝細胞肥大、空胞化、巣状及び単細胞壊死が見られた。ラットを使用した混餌投与による3ヶ月の試験で区分2のガイドランス値内の投与群(16~104mg/kg)で肝細胞肥大、肝臓小葉中間域の空胞化、門脈周囲、小葉周囲の空胞化、小葉中心壊死、甲状腺濾胞上皮過形成が見られた(甲状腺疾患は肝臓疾患の二次的なものとの記載がある)。イスを使用した混餌投与による1年間の試験で区分2のガイドランス値内の投与群(14~56mg/kg)で肝細胞肥大、軽度の多病巣型の空胞化が見られた(いずれも(JMPR(1997))。以上の報告より区分2(肝臓)とした。	区分2(肝臓)	健康有害性	危険	長期又は反復暴露による臓器(肝臓)の障害のおそれ	注意書き	マウスを使用した混餌投与による3ヶ月の試験で区分2のガイドランス値内の投与群(33~54mg/kg)で肝細胞肥大、肝臓単細胞壊死が見られた。この濃度以上で肝細胞肥大、空胞化、巣状及び単細胞壊死が見られた。ラットを使用した混餌投与による3ヶ月の試験で区分2のガイドランス値内の投与群(16~104mg/kg)で肝細胞肥大、肝臓小葉中間域の空胞化、門脈周囲、小葉周囲の空胞化、小葉中心壊死、甲状腺濾胞上皮過形成が見られた(甲状腺疾患は肝臓疾患の二次的なものとの記載がある)。イスを使用した混餌投与による1年間の試験で区分2のガイドランス値内の投与群(14~56mg/kg)で肝細胞肥大、軽度の多病巣型の空胞化が見られた(いずれも(JMPR(1997))。以上の報告より区分2(肝臓)とした。	2013.10修正
20A2320	4-ブromo-2-(4-クロロフェニル)-1-エトキシメチル-5-トリフルオロメチル-1H-ピロニドニル-3-カルボニドニル(別名クロルフェナビル)	122453-73-0	生殖毒性	区分外	—	—	—	注意書き	ラットの2世代繁殖試験(GLP対応)において、混餌投与濃度60-600ppmで繁殖能に影響がなく、生後形態分化のいずれの指標にも影響はなかったデータ(農薬抄録(2008))。ラットの器官形成期投与(経口、用量25-225mg/kg/day)で、生殖毒性の検査項目に影響がなく、催奇形性も認められなかったデータ(農薬抄録(2008))。およびウサギの器官形成期投与(経口、5-30mg/kg/day)で着床と胎児の関する検査項目に影響がなく、催奇形性も認められなかったデータ(農薬抄録(2008))より、区分外に該当するが、リスト2のデータである事から分類できないとした。なお、以上のデータはEPA PESTICIDE(2001)にも掲載されている。	分類できない	—	—	—	注意書き	ラットの2世代繁殖試験(GLP対応)において、混餌投与濃度60-600ppmで繁殖能に影響がなく、生後形態分化のいずれの指標にも影響はなかったデータ(農薬抄録(2008))。ラットの器官形成期投与(経口、用量25-225mg/kg/day)で、生殖毒性の検査項目に影響がなく、催奇形性も認められなかったデータ(農薬抄録(2008))。およびウサギの器官形成期投与(経口、5-30mg/kg/day)で着床と胎児の関する検査項目に影響がなく、催奇形性も認められなかったデータ(農薬抄録(2008))より、区分外に該当するが、リスト2のデータである事から分類できないとした。なお、以上のデータはEPA PESTICIDE(2001)にも掲載されている。	2013.10修正
20A2322	ジ-n(5)-シクロペンタジエニルビス[2,6-ジフルオロ-3-(ヒロール-1-イル)フェニル]チタン(IV)	125051-32-3	生殖毒性	分類できない	—	—	—	注意書き	EU分類がカテゴリー-3、EU分類がカテゴリー-3、リスクリーズ R62であるが、評価データが入りできないので分類できない。	分類できない	—	—	—	注意書き	EU分類がカテゴリー-3、リスクリーズ R62であるが、評価データが入りできないので分類できない。	2013.10修正
20A2340	砒酸	7778-39-4	酸性液体	区分外(水溶液)	—	—	—	注意書き	酸素を含む無機化合物であり、ICSC(2004)では80%水溶液を強力な酸化剤としているが、データがなく分類できない。国連危険物輸送動向がクラス・区分6.1(国連番号1553(液体))。	分類できない	—	—	—	注意書き	酸素を含む無機化合物であり、ICSC(2004)では80%水溶液を強力な酸化剤としているが、データがなく分類できない。国連危険物輸送動向がクラス・区分6.1(国連番号1553(液体))。	2013.10修正
20A2340	砒酸	7778-39-4	金属腐食性物質	区分外(水溶液)	—	—	—	注意書き	データがなく分類できない。国連危険物輸送動向がクラス・区分6.1(国連番号1553(液体))。	分類できない	—	—	—	注意書き	データがなく分類できない。国連危険物輸送動向がクラス・区分6.1(国連番号1553(液体))。	2013.10修正
20A2345	亜砒酸鉛	10031-13-7	自己反応性物質および混合物	区分外	—	—	—	注意書き	爆発性に関連する原子団、あるいは自己反応性に関連する原子団を含んでいない。	分類対象外	—	—	—	注意書き	爆発性に関連する原子団、あるいは自己反応性に関連する原子団を含んでいない。	2013.10修正
20A2349	砒酸ナトリウム	13464-38-5	可燃性固体	区分外	—	—	—	注意書き	ヒ酸ナトリウム、二塩基性(CAS 7778-73-0 ID 20A2355)が不燃性(ICSC,1999)であることから本物質も不燃性と判断した。	区分外	—	—	—	注意書き	ヒ酸ナトリウム、二塩基性(CAS 7778-43-0 ID 20A2355)が不燃性(ICSC,1999)であることから本物質も不燃性と判断した。	2013.10修正
20A2349	砒酸ナトリウム	13464-38-5	自然発火性固体	区分外	—	—	—	注意書き	不燃性。ヒ酸ナトリウム、二塩基性(CAS 7778-73-0 ID 20A2355)が不燃性(ICSC,1999)であることから本物質も不燃性と判断した。	区分外	—	—	—	注意書き	不燃性。ヒ酸ナトリウム、二塩基性(CAS 7778-43-0 ID 20A2355)が不燃性(ICSC,1999)であることから本物質も不燃性と判断した。	2013.10修正
20A2349	砒酸ナトリウム	13464-38-5	自己発熱性物質および混合物	区分外	—	—	—	注意書き	不燃性。ヒ酸ナトリウム、二塩基性(CAS 7778-73-0 ID 20A2355)が不燃性(ICSC,1999)であることから本物質も不燃性と判断した。	区分外	—	—	—	注意書き	不燃性。ヒ酸ナトリウム、二塩基性(CAS 7778-43-0 ID 20A2355)が不燃性(ICSC,1999)であることから本物質も不燃性と判断した。	2013.10修正

物質ID	物質名	CAS番号	項目	修正前						修正後						備考
				分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類根拠・問題点	分類結果	絵表示	注意喚起語	危険有害性情報	注意書き	分類根拠・問題点	
20A2349	砒酸ナトリウム	13464-38-5	生殖毒性	区分2	健康有害性	警告	生殖能又は胎児への悪影響のおそれの疑い		分類の指標となる本物質の知見は見つからなかったが、ハムスターへの静脈内投与(EHC 224.2001)、マウスへの腹腔内投与(NITE初期リスク評価書2008)で発生毒性が認められ、ヒ素およびヒ素化合物についての、List 1のEHC 224 (2001)のヒトに関する記述「生殖への影響が示唆される」および動物での知見「母体毒性が認められる用量での胎児毒性および催奇形性」から区分2とした。なお、List 1相当のCatalog of teratogenic agents (2004)には「無機ヒ素はヒトの催奇形性物質ではないとの結論を支持」との記述がある。	区分2	健康有害性	警告	生殖能又は胎児への悪影響のおそれの疑い		ハムスターへの静脈内投与(EHC 224.2001)、マウスへの腹腔内投与(NITE初期リスク評価書2008)で発生毒性(神経奇形の発生率増加)が認められ、ヒ素およびヒ素化合物についての、List 1のEHC 224 (2001)のヒトに関する記述「生殖への影響(胎児、新生児及び生後の死亡率増加、自然流産、先天異常など)が示唆される」および動物での知見「母体毒性が認められる用量での胎児毒性および催奇形性」から区分2とした。	2013.10修正
20A2349	砒酸ナトリウム	13464-38-5	標的臓器/全身毒性(単回暴露)	区分1(消化器系、循環器系、神経系、血液系、呼吸器、皮膚、腎臓、肝臓)	健康有害性	危険	臓器(消化器系、循環器系、神経系、血液系、呼吸器、皮膚、腎臓、肝臓)の障害		分類の指標となる本物質の知見は見つからなかったが、イヌへの静脈内投与により腎臓に影響を与える(EHC 224.2001)、「ヒ素化合物のヒトでの急性毒性としては消化管、心血管系、神経、血液系の症状、結膜炎及び皮膚炎を生じさせるとともに鼻粘膜、咽頭、気管への刺激、ヘモグロビン塊の尿管管遮断による頻尿もしくは無尿症」(IARC 23 (1980))、「骨髄機能抑制、肝臓肥大」(EHC 224 (2001))等の記載があることから、消化管、循環器、神経、血液系、呼吸器、皮膚、腎臓、肝臓が標的臓器と考えられた。以上より区分1(消化器系、循環器系、神経系、血液系、呼吸器、皮膚、腎臓、肝臓)に分類した。	区分1(消化器系、循環器系、神経系、血液系、呼吸器、皮膚、腎臓、肝臓)	健康有害性	危険	臓器(消化器系、循環器系、神経系、血液系、呼吸器、皮膚、腎臓、肝臓)の障害		イヌへの静脈内投与により腎臓に影響を与える(EHC 224.2001)、「ヒ素化合物のヒトでの急性毒性としては消化管、心血管系、神経、血液系の症状、結膜炎及び皮膚炎を生じさせるとともに鼻粘膜、咽頭、気管への刺激、ヘモグロビン塊の尿管管遮断による頻尿もしくは無尿症」(IARC 23 (1980))、「骨髄機能抑制、肝臓肥大」(EHC 224 (2001))等の記載があることから、消化管、循環器、神経、血液系、呼吸器、皮膚、腎臓、肝臓が標的臓器と考えられた。以上より区分1(消化器系、循環器系、神経系、血液系、呼吸器、皮膚、腎臓、肝臓)に分類した。	2013.10修正
20A2363	メタンアルソン酸鉄	33972-75-7	急性毒性(経口)	分類できない	-	-	-		データなし。メタンアルソン酸カルシウムについての有害性情報はほとんどない。フリー体であるメタンアルソン酸についてはATSDR(2007)、EHC 224 (2001)、HSDB (2003)に記載(経口LD50値:1000mg/kg程度)があるが、無機ヒ素化合物と比較して低毒性である。	分類できない	-	-	-	データなし。	2013.10修正	
20A2363	メタンアルソン酸鉄	33972-75-7	発がん性	区分1A	健康有害性	危険	発がんのおそれ		本物質自身の知見は認められないが、IARC(IARC Suppl.7, 1987)、日本産業衛生学会(2000)においてヒ素化合物をヒト発癌物質と分類していることから、区分1Aとした。有機ヒ素化合物であるジメチルアルソン酸については発がん性の報告(EHC 224 (2001))がある。	区分1A	健康有害性	危険	発がんのおそれ	ヒ素化合物の発がん性評価として、IARCではグループ1(IARC Suppl.7 (1987))、日本産業衛生学会では第1群(産業衛生学雑誌 50巻(2000))に分類されていることから、区分1Aとした。	2013.10修正	
20A2364	メタンアルソン酸カルシウム	6423-72-9	発がん性	区分1A	健康有害性	危険	発がんのおそれ		本物質自身の知見は認められないが、IARC(IARC Suppl.7, 1987)、日本産業衛生学会(2000)においてヒ素化合物をヒト発癌物質と分類していることから、区分1Aとした。有機ヒ素化合物であるジメチルアルソン酸については発がん性の報告(EHC 224 (2001))がある。	区分1A	健康有害性	危険	発がんのおそれ	ヒ素化合物の発がん性評価として、IARCではグループ1(IARC Suppl.7 (1987))、日本産業衛生学会では第1群(産業衛生学雑誌 50巻(2000))に分類されていることから、区分1Aとした。	2013.10修正	
20A2365	ニッケル	7440-02-0	可燃性固体	分類できない	-	-	-		粉塵、ダストはUN1436に該当し、IMDGC「easily ignited, causing explosion」と記載されている。粒子サイズ、形状等が結果に影響するので、国連文書2.7.2.4.注記に従い、所定の試験をして区分判定すべきである。ブロック状態の亜鉛は区分外と考えられる。	分類できない	-	-	-	形状が特定されておらず、またデータがないので分類できない。また、ICSC(2004)では粉塵は引火性であるとしており、Sax (11th, 2004)では通常では金属は微粉末になるほど火災や爆発の危険度が高いとしている。なお、国連危険物輸送勧告では、金属粉末(可燃性のもの)(他に品名が明示されているものを除く)はクラス・区分 4.1 容器・等級II, III(国連番号 3089)で、「区分1」または「区分2」に該当している。	2013.10修正	
20A2375	1,2-ジクロロプロパン	78-87-5	金属腐食性物質	区分外	-	-	-		データがなく分類できない。国連危険物輸送勧告がクラス3(国連番号1279)。	分類できない	-	-	-	データがなく分類できない。国連危険物輸送勧告がクラス3(国連番号1279)。	2013.10修正	
20A2264	3-クロロトルエン	(変更前) 25168-05-2 (変更後) 108-41-8	変更なし	変更なし	変更なし	変更なし	変更なし	変更なし	変更なし	変更なし	変更なし	変更なし	変更なし	変更なし	変更なし	2020.12修正
20A2277	7-メチル-1,6-オクタジエン	42152-47-6	水生環境有害性(急性)	変更なし	変更なし	変更なし	変更なし	変更なし	藻類の72時間ErC50 > 0.022 mg/L、甲殻類(オオミジンコ)の48時間EC50 > 0.51 mg/L、魚類(メダカ)の96時間LC50 > 0.52 mg/L(いずれも環境庁生態影響試験, 2002)から、藻類、甲殻類、魚類の信頼性のある試験が得られており、その結果、いずれも試験濃度では影響がみられないことから判断して本物質の急性毒性は低いことを示しており、区分外とした。	変更なし	変更なし	変更なし	変更なし	藻類の72時間ErC50 > 0.022 mg/L、甲殻類(オオミジンコ)の48時間EC50 > 0.51 mg/L、魚類(メダカ)の96時間LC50 > 0.52 mg/L(いずれも限度試験(藻類は暴露開始時・終了時の測定値から計算、甲殻類及び魚類は暴露開始時の測定値)、環境庁生態影響試験, 2002)から、藻類、甲殻類、魚類の信頼性のある試験が得られており、その結果、いずれも試験濃度では影響がみられないことから判断して本物質の急性毒性は低いことを示しており、区分外とした。	2023.09修正 分類根拠の修正	